

2024年2月10日(土)、都留文科大学比較文化学科は、学科創立30周年を記念したシンポジウム「共生と記憶の比較文化論—ともにつくる歴史と現在」を開催しました。その目的は、本学科の教員や卒業生、在学生在が一堂に会し、「国際性・現代性・学際性」を基本理念とする比較文化学科が積み重ねてきた学知と実践について、多角的に議論することにあります。当日は、会場となったTHMC(6号館)201教室、そしてオンラインでの参加も含めて約50名が集まり、活発な意見交換がなされました。

開会の辞では、加藤敦子学長が比較文化学科の歩みと成果を振り返り、今後の展望を語りました。学長は、教員養成系大学として知られる本学において、教員養成課程を擁しない学科として1993年に誕生した比較文化学科が、異なる文化や価値観を尊重しながら、

共生の可能性を探求する研究重視の学科として社会に貢献してきたことを評価しました。そして、グローバル化とともに世界における多様性の理解、そしてそれにもとづく社会的実践がますます重要となるなかで、比較文化学科がより重要な役割を果たすことへの期待を述べました。



特集：比較文化学科創立30周年 ～記念シンポジウム開催報告～

第1部では、比較文化学科長である菊池信輝教授がシンポジウムの趣旨説明を行いました。菊池教授は、本シンポジウムのテーマである「共生」と「記憶」について、比較文化学科の過去と現在における教育・研究実践とのつながりから解説しました。この30年を通じて、単に多様な人、モノ、そして自然が共存するのみならず、相互に影響し合いながら、新たな価値や意味



を創出することとしての「共生」、過去の出来事や経験をただ検証・再現するのではなく、現在の文脈や目的に応じて再構成・想起することとしての「記憶」という学科創立以来の学際的な研究課題の重要性は減ずるどころか、ますます増えています。それを象徴する学科10周年記念論集『記憶の比較文化論—戦争・紛争と国民・ジェンダー・エスニシティ』、そして20周年記念論集『せめぎあう記憶—歴史の再構築をめぐる比較文化論』のあゆみを踏まえ、本年3月刊行予定の30周年記念論集『共生と記憶の比較文化論—ともにつくる歴史と現在』に収録された論文の紹介から、「共生」と「記憶」というテーマが、いかに具体的な学科の研究実践に応用されているかが解説されました。

第2部では、比較文化学科出身の大学院生3名が、30周年記念論集の内容に関するパネル・ディスカッションを行いました。パネリストは、白鎮慶氏(東北大学大学院文学研究科在学中)、余楽氏(お茶の水女子

大学大学院人間文化創成科学研究科在学中)、山田恭弘氏(東北大学大学院国際文化研究科在学中)で、比較文化学科における多様で複雑な世界への知的探究をきっかけに、それぞれ日中関係史、中国農村研究、白話小説翻訳史という異なる分野についての学びを深めています。パネリスト3名は、それぞれの研究テーマに関連する「共生」と「記憶」の問題を提示し、各論の分析や評価を行いました。また、パネリストの質問やコメントに対し、各章の著者である比較文化学科の教員たちもリプライをおこない、和気藹々としたなかにもアカデミックな厳格さの漂う、比較文化学科らしい雰囲気に会場がつつまれました。

第3部では、比較文化学科における学生の自主的な学びの熱心さを象徴する活動である「比較文化学会」による活動助成金などを獲得し、フィールドワークや



資料調査を行った現役学生4名が研究成果発表を行いました。発表者は、比較文化学科3年の見上響さん、高橋夏未さん、そして4年の李俊儀さん、大野千緒さんで、それぞれが国内外の様々な地域でのフィールドワークにおいて実施した参与観察やインタビューの



結果を報告しました。そして、上野貴彦講師による閉会の辞とともに、シンポジウムは盛会のうちに終了しました。

本シンポジウムは比較文化学科の30周年を祝うものであったと同時に、戦争・紛争問題、社会経済的な格差の拡大を背景とした排外主義やポピュリズム政治の興隆、国内外のハラスメント事件の頻発、領土問題とその背景にあるナショナリズムや伝統的価値観の相剋、さまざまなマイノリティ性の交差のなかに顕在化した人権問題など、比較文化学科の研究・教育がこれからも真摯に向き合わなければならない問題が山積していることを確認する機会にもなりました。批判的思考に根ざしながらも、同時に温かく肯定的な参加者のフィードバックを受けとめるなかで、比較文化学科教員一同、学内外の関係者の皆様のご協力を仰ぎつつ、これからも教育・研究活動に一層邁進する決意を新たにしました。



30周年記念論集
『共生と記憶の比較文化論
—ともにつくる歴史と現在—』

特集：学部改編とカリキュラム改訂および 副専攻プログラムについて



副学長
(学生・教育担当)

佐藤 明浩

本学では、令和6(2024)年度から、従来4学科で構成されていた文学部を国文学科と英文学科の2学科、2学科で構成されていた教養学部を学校教育学科、地域社会学科、比較文化学科、国際教育学科の4学科の構成に改編し、あわせて、共通教育および各学科のカリキュラムを改訂します。また、全学、各学部の目的をあらためて明示し、各学科の3ポリシーも更新します。

文学部では、教育内容、研究方法において共通性の高い2学科で構成されることにより、ことばの営みについて、時間、空間を超えて探究するという学びの中心が明確になりました。教養学部では、異なる特徴をもつ4学科が連携することにより、多様性をもち変化を続ける世界を知り、探究し、見出される問題を解決する力を養う体勢が強化されました。全学の目的にも、各学科のディプロマポリシーにも示されているように、大学4年間の学びをとおして、生涯にわたって学び、探究し、成長し続ける人を育むということを教育の目的に据えています。

各学科とも、1、2年次においては、それぞれ専門性の高い探究をする基盤となる知識、技能を幅広く習得することが中心となります。そこで重視されているのが、演習、実習等の学生が主体的にまた互いに協働して実践を重ねる学びです。それが、3年次以降のいわゆるゼミにおいて実践的に探究、研究を深め、また、学生が主体的に課題を設定して卒業研究をすすめ、集大成としての卒業論文を作成することへとつながっていきます。

各科目の学びの成果を確実に定着させるために、1年度に履修できる単位の上限を従来より引き下げて、各学科とも48単位とします。なお、一定の要件を満たす学生には、教職の副免許や諸資格の取得に必要な科目について、各年次で8単位までの追加履修を可能とします。また、卒業に必要な単位は各学科とも124単位とし、共通教育科目のうち、教養科目は12

単位必修、共通外国語科目は8単位必修とします。このような従来よりも限られた科目数の履修によって豊かな学びの成果が得られるように、授業科目を精選、統廃合するとともに、世界の多様化に対応できるよう科目を新設しました。また、卒業要件として、各学科の選択科目に教職科目、資格科目を含めることができるようになり、それによって、学生の履修の自由度が増します。

このように要件が整えられ、自由度が高くなったカリキュラムにおいては、ある程度限られた科目履修のなかで各自の学びの目的が達成できるよう、学生が主体的に計画を立てて履修をすすめていくことがますます重要となります。まず、学生が自らの学びの目的を明確にし、どのような課題に向かって専門的な探究を深めていくのかを明確にすることが大切でしょう。そのうえで、将来の進路も見据えて、教職免許、諸資格の取得をめざす場合は、それに応じて履修計画を立てることになります。また、中心となる専門的な学び、探究のほかに、興味、関心のある分野において学びを深め、体系的な知識、技能を身につけることができるよう、10のTsuru副専攻プログラムを設けます。これらも、計画的な履修の指針となるでしょう。

Tsuru副専攻プログラムには、すでに実績のあるジェンダー研究プログラム、環境ESDプログラムが含まれています。一方、新たなプログラムのうち、デジタルシティズンシッププログラムは教養科目に新設されたデジタルシティズンシップ科目群が基軸となっており、フィールド・ミュージアムプログラムは教養科目のうち、地域交流研究科目群から更新されたフィールド・ミュージアム研究科目群が基軸となっています。前者はこれからの時代に対応する情報科学、後者はさらなる充実をめざす地域研究を内容とする教育の実践です。文理の垣根を越えて新しい教育のあり方を追究するTSURU-STEAMプログラムもあります。これらの教育を実践する場として、今年度供用が開始されたTHMC、来年度新築予定の都留フィールド・ミュージアム(仮称)の施設が利用されていくことになります。その他のプログラムも、共通教育科目、各学科の専門科目を目的に応じて有機的に結び構成されています。Tsuru副専攻プログラムそれぞれの内容については、別に作成されたパンフレットに掲載の記事を基に記しておきます。

○デジタルシティズンシッププログラム

データサイエンスの技術や応用、社会的な課題などを学び、情報の共有や適切な利用などの知識、スキルを身につけます。

○ジェンダー研究プログラム

さまざまな学問領域の連携により、だれもが人間らしく生きていくために必要な「知と技能」をともに学び合います。

○フィールド・ミュージアムプログラム

地域で人びとの暮らしやムササビなどの自然にじかに触れるなど「生きた学び」を経験し、地域の次代を担う力量を育みます。

○環境ESDプログラム

環境に配慮した持続可能な社会の構築のために、各種の環境分野で活躍できる人材の育成を目的としています。

○国際開発・協力プログラム

大都市の大学に集中しがちな国際協力の学びを都留で提供し、その知を身につけた人材を都留から輩出することを目標とします。

○国際日本研究プログラム

「日本文化と社会」「世界の中の日本」に関わる多角的な知識・理論、学術的分析方法、思考力を二言語で身につけることを目標とします。

○日本体感プログラム

学科横断型のテーマ型プログラムです。「日本」や「日本文化」を味わい、それを多角的に発信する力を身につけることを目標とします。

○TSURU-STEAMプログラム

教科横断的で主体的・対話的な深い学び、課題解決型・探究型の学習活動のあり方を「子ども探究広場」を通して実践的・実験的に研究します。

○英文学科グローバルキャリアプログラム

英文学科の学生が対象。高度な英語コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につけることを目指します。

○国文学科キャリアデザインプログラム

国文学科の学生が対象。一般企業や公務員を目指す学生にとって、卒業後の進路を見据えた履修の指針となるプログラムです。

学生各自が、各年次において、そして大学生生活4年間のなかで、どのような知識、技能を身につけ、何を実践できるようになったのか、成長の成果を自身で評価し、自覚できるようになることが、次のステージへとすすんでいく推進力となります。それは、前に記した、生涯にわたって学び、探究し、成長し続ける人を育むという目的の達成にもつながります。この度のカリキュラム改訂によって、その基盤が整えられたと考えられますが、そこで実際にどれだけ豊かで意義深い教育が実践されていくかが重要なことは言うまでもありません。そして、都留文科大学で学んだ学生が、どのよう

に成長し、また成長し続けるポテンシャルを有するようになったのか、具体的に見えるようにしていく—学習成果の可視化—も、カリキュラムの実践にあたってすすめていくべきことでしょう。

この度の学部改編、カリキュラム改訂を期に、学生と教員とが協働して豊かな学びを実践し、より質の高い教育の成果が学ぶ人たち自身にもよく認識され、また社会一般にも発信できるよう展開していくことが望まれます。

退職に当たって



学術・研究担当理事（副学長）

田中 昌弥

意義深かった都留での教育・研究

法人化が始まった2009年に初等教育学科に着任し、15年間お世話になりました。直近の5年半は、学外研究やコロナ禍における理事・副学長職との兼務などにより、残念ながら指導生を持たない立場になりましたが、全国から集まった学生たちと過ごせた時間はとても幸せでした。伊豆や河口湖での卒論合宿、学校見学やインタビューを兼ねた北海道旅行といった企画を自主的に進めてくれる代々の学生の行動力に感嘆したことも懐かしい思い出です。

本学の教育学研究も興味深いものでした。小林重章先生と故・箱石泰和先生を軸とする教授学の伝統と、森博俊先生や田中孝彦先生が大学院で進められた臨床教育学研究は、今後の教育においてさらに重要となる分野です。教育課程論を担当するゼミの教員として採用された私としては、ナラティブ論の視点で両者を統合し、カリキュラム論の国際的動向に接続することが本学の教育学の深化につながるとの見通しで検討を進めてきました。在職中に不十分ながらも一定の仕事ができたのは、他大学に比べて恵まれた研究条件のお陰と感謝しています。

教職支援センターの立ち上げ

学務では、教職支援センターの発足にかかわり、初代センター長を拝命したことを機に、諸先輩が取り組んできたSATを、「センター1」と学部教員の協働による「教育フィールド研究」として体系化し、「センター2」の業務として、本学を卒業した全国の若手教員に対する支援を行うという二本柱の構想を学内で認めていただきました。前者は亀田孝夫先生、後者は山崎隆夫先生、宮下聡先生といった特任教授の方々の深い理解とご努力によって実現に至りました。この取り組みはマスコミや大学評価、学会でも注目されましたが、そこで得られた知見を学部教育にフィードバックする機会となるはずだったカリキュラム改訂の前にセンター長を交代す

ることになったのは残念でした。

副学長としての得難い経験

私が本学に移ってきた最大の理由は、前任校で若い時期から大学運営の業務に駆り出されたことに辟易し、教育・研究という大学教員本来の仕事に専念したかったからです。その私に副学長の役目が回ってきたのはいささか不本意な巡り合わせでしたが、結果的には、得難い経験になったと思っています。

一つは、人間の様々な側面を見ることができたことです。着任と同時にコロナ対策に忙殺されたことは、学長となられた藤田英典先生にとっても想定外の事態だったようですが、私自身も2カ月近く自宅に戻らず、大学会館から土・日曜も出勤する日々が続きました。しかし、それにより、未曾有の危機においても知恵を出し合い、不安に駆られる学生や教員に浮足立つことなく対応し、大学を守ろうとする職員の方々の奮闘に接することができました。また、どんな時にも明るさと人生の軸を見失わない杉本光司副学長の姿は私の生き方の手本となりました。

もう一つは、将来構想委員会を立ち上げ、学部再編を含むボトムアップの議論ができたことです。人文社会科学の重要性とさらなる可能性を明らかにし、社会的に認知してもらうことは、人類にとっても、本学の生き残りにとっても重要です。この点について様々な分野の先生方の見識に触れたこと、それをさらに深化させる「都留のヒューマニティーズ研究」という副学長裁量経費企画が加藤敦子学長をはじめとする常任理事の方々の賛意を得られ、参加を表明してくださった先生方の力で進められ始めたのはありがたいことです。

以上の感謝と共に、今後も都留文科大学が、社会的な役割を果たし、発展されることをお祈りしています。

学んで時に之を習う



国文学科教授 寺門 日出男

都留文科大学には、まず学生として四年在籍し、卒業後八年の武者修行を経て、本学に着任以来三十二年、何とか大過なく定年まで勤務することが出来た。まずはお世話になった皆様に、心から御礼申し上げたい。

学問への眼を開かせてくれたのが、学生時代の四年間だった。入学当初は、第一志望の学校に落第して自暴自棄になっていたが、やがて、授業を通して文学研究の楽しさに引き込まれていった。楠元先生の与謝蕪村、大久保先生の万葉集、田部井先生の唐詩の講義等、正に目から鱗が落ちる思いがした。自分が今まで文字の上っ面しか見ていなかったことを痛感し、物を読むとはどういうことかを教えられた。やがて、もっと勉強したいと考え、大学院進学をめざすようになった。

三年進級時に漢文ゼミを選択したが、国文学科ということもあって、カリキュラムでは漢文の科目が非常に少なかった。そこで有志とともに田部井先生に、課外で読書会を設けるので指導をお願いしたいと直訴した。当時、先生は多忙を極められていたはずだが、快く引き受けて頂き、一緒に陶淵明の詩を読んで下さった。ちなみに、先生は後年、『陶淵明集全釈』を刊行されることになる。我々が厚



ゼミ合宿 安曇川藤樹書院にて

かましくもお願いした読書会が、幾らかでも寄与したのではと、勝手に考えている。

平成四年四月、思いがけず母校の専任教員に採用して頂いた。着任以前、すでに京阪神地区の複数の大学・短大で、それなりに教育経験はあったが、担当したのは教員免許取得のための必修授業がほとんどであった。もちろん、私の拙い授業を通じて、幾らかは漢文に興味を持ってくれた学生もいただろうが、授業自体は大教室で教員が講義し、学生が聴くという、一方通行のものばかりであった。

しかし、都留においては、(少数ではあるが)熱心な学生が相変わらずいて、研究会や勉強会等、授業以外で付き合ってくれる学生がいた。それが、着任直後から現在に至るまで、(コロナ禍では制限されたけれど)絶えることがなかったのが、何より有り難かった。

私の専門は中国思想だが、国文学科ということもあり、研究会等で読むのは漢詩が主であった。それらは、長い教師生活を通じて、大抵は読んだことのある作品ばかりであったけれども、学生諸君と一緒に、注釈を参照しながら読むと、しばしば新たな発見があった。

現在の日本において、勉強熱心な学生に囲まれ、ともに読書の悦びを味わうことができるのは、果たしてどれだけあるのだろうか。

振り返ってみれば、学生として、また教員として、都留で過ごすことができたのは、幸福なことだったと思う。これからも、都留文科大学が、こうした学びの場で在り続けてほしいと願ってやまない。

都留文科大学の財産： 在外研究制度、研究と教育



比較文化学科教授 邊 英浩

1993年4月比較文化学科が新設された翌年4月私は赴任した。思えば設立時の状況を知るのは私が最後となった。赴任後新学科設立に尽力した諸先生たちの議論に触れ、熱が伝導してきた。学生も1年生、2年生しかいなかったが、先輩がいないため自分たちで学科を作っていたので入学したという強者が多く、新歓オリエンテーションで2年生オリターたちは「私たちがするので先生たちは何もしなくていいです」と頼もしく、教員に負けず劣らず熱かった。学科内では共生、人権などに深い理解を有する優れた先生方もいたが、時に他学科の教員から酒席で「君は戦争が起きたらどこの国の鉄砲を担ぐんだ！」などと言われることがあったが、私は冗談っぽく「私、体が弱いんです。鉄砲は重くてとても担げません。水鉄砲ぐらいしか無理なんです」と応答していた。どこの国の鉄砲も担がない第三の選択肢があると婉曲に言ったつもりが、相手は怒りだしたりしたが。

本学にはほかの大学では存在しないことも多くなった在外研究制度があり、私も1年間ソウル大学、半年間は南カリフォルニア大学に行かせていただき深く感謝している。良い研究をしてこそ、良い授業ができるという信念を持つ学長たちがこの制度を守りぬいてきた。私はソウル大学滞在時に、多くの先生がたと交流が生まれ、何度も目からうろこが落ちる思いをさせられた。韓国併合不法性論争にも参加させていただき、その国際共同研究書2冊の編集、刊行に深く関り、韓国併合条約は国際法上無効という確信を得たが、今後の日本と朝鮮半島のことを考える新しい視座を得ることができたのである。この時の仕事ぶりを評価していただき、世界中の著名な学者が参加した『韓国強制併合100年再照明国際学術会議』（東北アジア歴史財団主催、2010年8月）にて本学の看板を背負って全体の基調講演者に指名されたのは名誉なことであった。またこの時の縁の連鎖で天才、金泰昌先生（当時京都フォーラム主宰者）に出

会える幸運に恵まれた。欧米の古典、漢文古典まで自在に操り現代世界を照射する「公共哲学」を提唱しつつ、韓国的思考、哲学の長所を剔抉する金泰昌先生から私の研究の方向性に大きな影響を受けることになったが、まだとても消化しきれないままであり、どうやら息絶えるまで課題であり続けそうである。

南カリフォルニア大学滞在時にはロサンゼルスのコリアンタウンで生活する貴重な経験を得た。商店経営者は韓国系米国人で従業員はヒスパニック系というパターンが多かったが、最低賃金が守られておらず、米国ではどこでもよくある景色であった。なぜ？警察が取り締まらない、政治家たちが警察を指導しないためである。最低賃金を国家ぐるみで守らない法治国家！最低賃金労働者が勝手に流入してきてくるため、米国企業は低賃金を求めて国外にでていく必要がない。これが米国資本主義の特質で、ここから独自の移民労働者たちの権利獲得運動が生じることに気がつき、日韓の外国人問題を考える時の比較座標軸となりえることに気がついた。

在外研究で得た知見は研究として深め、講義に反映させていくこととなった。講義をきく学生たちの反応もうれしいものであった。今後も都留文科大学の発展維持のためには、在外研究制度は欠かせないと確信している。多くの教員がその幸運に預かり続けることができ、今後の都留文科大学の発展に寄与することを今後離れたところから祈念していくこととしたい。



最終講義終了後ゼミ生たちと

繋げるということ



学校教育学科教授 清水 雅彦

1999年に着任してから四半世紀が経った今でも、初めて大学に入り、公募の最終面接を受けた日のことを鮮明に覚えています。それも含めて、この間の様々な場面が追想され筆が進まない……。長きにわたりお世話になったことに心から感謝し、まずはこの場を借りて御礼を申し上げます。

1999年と言えば、ノストラダムスの予言と世紀末ブームが沸き起こり、EU加盟国のうち11カ国において単一通貨「ユーロ」が誕生した年（流通は2002年）です。そもそも西暦はキリスト教における救世主イエス・キリストの誕生を紀元（元年）とする数え方。「千年王国」の言葉通りキリストが再臨し、この世を統治することを祝す意味合いで「ミレニウム」が唱えられますが、この言葉が日本にもたらされたのも1999年（平成11年）のこと。私が都留文科大学の教員として初めて接したのは正にこのミレニウム世代であり、この学生たちは皆、20世紀に生まれた昭和の子でした。

学生の資質が変わってきた、これはよく聞く言葉です。ただ私たち自身が「今の若い者たちは!？」と言われ続けてきたことを思えば、その時流にあった見方、接し方、対処があるのでしょう。事実、都留の学生はやはり素晴らしいと思うことが多く、授ける身でありながら多くの示唆をいただけた、と感じています。昭和から平成、そして令和へと時代は進み、今在学する学生たちは皆、21世紀に生まれた平成の子。まもなく令和生まれの学生が入学してきます。

大学を創設した頃を知る先輩方と共に時を過ごせたことは幸いで、その毅然としたお姿を、常に指針としながら歩んできました。当時は大学の規模も今ほど大きくはなく、教職員が一体と

なり手作り感ある運営がされていたことを、懐かしく思い返しています。もちろん大学が変容を遂げる中でも、学生思いの教員が、事務方が、熱い面持ちで立ち回り、そこに流れる深い思いを共有し今に繋いできたことは感動的であり、その一端を担ってきたことを自負しています。

「繋げる」とは、努力を成功に結び付けること。ただ結果の予測はできませんし、後になってあの時の経験が今に生かされていると気付くのもよくあること。だからこそ、今を精一杯生きることこそ大切である、と思えるのです。

この2月3日にうぐいすホールで開催した「最終講義・清水雅彦テノールリサイタル」の「ご挨拶」の最後の部分を転載させていただきます。

『たくさんの思いが溢れるここ（うぐいすホール）で最終講義を開催させていただくことは大きな喜びであるとともに、平和・平穏がままならない世の中であって、さらに真摯に歩みたい、歌い続けたい、未来へ繋げていきたい、との思いを強くしています。ともに歌い、想い、研究に勤しんでくれた多くの学生たち、大学教職員の皆さん、都留市民の皆さん、そしてすべての皆様への感謝とともに……。』



卒業演奏会（うぐいすホール2024.1.27）後にゼミ生と

国際教育学科とともに歩んだ7年間

国際教育学科准教授 山辺 恵理子



都留文科大学に私が着任したのは、国際教育学科が文学部に新設された2017年の4月でした。それまで都留文科大学といえば、尊敬する教育哲学者の大田堯先生（1918-2018）が以前学長を務められていたことを知っていたので、地元の教師とともに土に足をつけながら日本語で丁寧に教育を哲学する研究者が集う大学、という印象を持っていました。そのような大学で教員養成の国際化を進める学科の立ち上げに携わらせてもらえることに心躍らせながら、都留での勤務を開始しました。

当時、国際教育学科はまさに立ち上げ途中のスタートアップ企業のような状態でした。まだ5号館が完成しておらず、研究室は駐車場の端に建てられたプレハブ内にありました。新入生オリエンテーションでは、教員もほぼ新任ばかりだったため、学生便覧をその場で読み込んで学生とともに理解を進めていきました。北欧の諸大学との交換留学制度（T-SAP）もまだ確立しておらず、契約を結びに弾丸出張で先方を訪問し、慌てて現地の教員養成制度を学びました。目の前には常に課題が山積していて、毎日新たな課題も見つかり、それらにひたすら対処し続ける日々を送りました。それでも、教員養成の国際化というミッションに意義と可能性を感じて業務に邁進しました。そのような中、支えになったのは逞しい学生たちの存在です。

国際教育学科の最大の長所は、開設時から一貫して、自立心が強く、教員に対しても気兼ねなく意見や要望を伝えてくれる学生が多い点にあります。そのため、学生の「ために」教員が国際教育学科という新規事業を立ち上げる、というより、学生と「ともに」立ち上げることができました。この学科の文化は、2018年度に初めて北欧の諸大学から留学生を受け入れた際にも自然と引き継がれ、留学

生たちも「ともに」学科をつくる仲間になってくれました。結果として、教員が考え、行動しただけでは実現できなかったほど学生の主体性や自律性、そして活発な対話に支えられる授業形態やカリキュラムが確立されました。

2020年の新型コロナウイルスの感染拡大はこうした国際教育学科の文化を打ち壊しかねない状況を生み出しました。交換留学は約2年間に渡り中断され、オンライン化に伴い学科専門科目の基盤である協働学習が揺るがされました。5号館3階で日常的に展開されていた学年を超えた学生同士の関わり合いも姿を消しました。その後の数年間は、学科をあげてコロナからの立ち直りに尽力する期間となりました。

4月から、国際教育学科は教養学部に移り、新しいカリキュラムが運用されます。新カリキュラムは、万が一の事態にも学生たちが安定的に国際教育を学べるように、と願って、先生方と議論を重ねて設計してきました。国際教育学科2.0のさらなる発展を心から願っています。

7年間、どうもありがとうございました。



コロナの大打撃を受けた学年の卒業式

おくることば



渦中で学んだ皆さんへ

国文学科教授
野口 哲也

卒業おめでとうございます。皆さんの晴れ姿を見送ることができ、心から嬉しく思っています。4年前、私たちは新生の皆さんを満足な形で迎えることができませんでした。共通テストへの移行期に不安な受験に臨み、コロナ禍で大学生活のスタートを待たされたあげく、突然に課題の山に圧倒される毎日となり、さぞ当惑し、不満を募らせたことでしょう。改めて忸怩たるものがありますが、私たちが必死に迷走する中で皆さんが不遇を託つばかりでなく、与えられた環境の中で最大限に学ぼうとする姿勢には感心させられました。おそらくは本意な形で叩き込まれることになった知識量や思索の深さ、それにストレス耐性など、コロナ以前の大学生よりはるかに充実しているのではないかと思います。他人との接触を避け、自室にこもって静かに過ごせという風潮は、国文学的な人間にとってむしろ喜ばし

い空気ではないかと思った人も少なくないのではないのでしょうか。結局、私たちはここ数年、ある意味で古典的な学問のあり方には適した環境を強いられた（与えられた）のかもしれませんが。無責任な言い方ですが自信を持ってください。幸い、ゼミに所属するところから状況への処し方も身につき、仲間と食事やお酒を共にしながら、研究からは逸脱した話も共有できるようになったのはせめてもの救いでしょうか。「遠隔」や「対面」などという妙な概念も違和感がなくなり、オンライン飲み会などという新しい様式も生まれましたね。これから各地で活躍する皆さんが、あのときは大変だったなという苦心談や、ひどい授業だったなという苦言を肴に同窓会で語り合うこともあるのでしょうか。そんな風景を恐々としながら楽しく想像しています。



Go and Make a Difference!

英文学科教授
Olagboyega, Kolawole Waziri

Very many congratulations to all of you on your graduation. Congratulations on weathering the academic rigors of the University for four years; congratulations on securing your desired jobs; and to those furthering their studies, congratulations for securing admissions to pursue your masters' degrees either in Japan or abroad.

Japan has been facing many challenges since the 1990s - supply chain issues, rising labor costs, and political issues have highlighted problems with Japan's reliance on China as a base for its manufacturing investments. With a low birthrate and aging population, Japan's social security system is under strain and is suffering from labor shortages. The consequences of the foregoing issues can have profound social and economic implications, including slower growth in output for some time.

However, the situation can be reversed. The Japanese history is replete with a culture and mentality that can turn adversity into prosperity. A country that roared back from the devastations of a World War to become the second biggest economy in the world, with little to no natural resources, can

overcome all challenges. Your generation should be prepared to work hard to return Japan to its rightful glorious position on the world stage. Therefore, I bid you to go and make a difference!

Your generation represents an important human resource within the Japanese society - you are agents of social change, economic development, and progress.

Be the hope the country is waiting for - in the form of participation, concern, volunteerism and by solving the country's social and economic problems. You can contribute through your labor and your entrepreneurial skills. You can take on leadership roles in your communities and play active roles in decision-making processes within the organizations you work in. And if proper opportunities arise, endeavor to represent your ideas in fields such as politics, then we can expect a drastic change in the country's growth.

In the immortal words of President Barack Obama, "Yes, you can"! I implore you to go and make a difference for the benefit of the entire country.



これから生きていくということについて

比較文化学科教授
伊香 俊哉

「こんな女に誰がした」というのは、1949年に公開された日本映画であるが（監督山本薩夫）、その内容はともかく、それにあやかって「こんな世界に誰がした」「こんな日本に誰がした」「こんな〇〇に誰がした」と心の中で叫ばずにはいられない昨今ではないでしょうか。

人生80年が当たり前の今日、皆さんの人生はまだ4分の1を過ぎたあたりです。あと4分の3をどこでどのように過ごしていくのかは様々でしょう。恵まれた環境で大過なく過ごして行けるのなら、それはそれで大変結構なことです。あるいは厳しい環境で日々格闘を重ねていく方もいるかもしれません。もしそうなったならば、日々を乗り越えるタフ

さをなんとか身につけたり、支え合って共に歩んでくれる信頼に足る友を作ることが必要になるでしょう。

今はこんな世の中ですが、「世の中は進歩する」、「いつかはもっといい世の中になる」、そういう気概をもって、皆さんひとりひとりが、これから生きていく「場」で、少しでもその「場」を「まし」にしていけるのであれば、世界は変わるかもしれません。そう信じましょう。そして私は、皆さんがそれぞれいる「場」において確固たる存在となることを心から望んでやみません。

どうか、ご卒業が新たな一歩へのしっかりとしたステップになるよう、心よりお祈りしております。



The world is your oyster!

国際教育学科講師
佐々木 南実

2020年、国際教育学科4期生の皆さんが入学し、私たちの小さな学科は初めて1-4年まで揃う「完成年度」を迎えました。

しかしその始まりは、予期せぬ出来事により予定とは程遠い船出となりました。コロナ禍の中、オンライン授業への急な適応が求められ、その中で、皆さんは逞しく立ち向かい、新しい学びの形に柔軟に対応してきました。

授業は画面を通して行われ、対面での交流が難しい状況下での学びは容易ではありませんでした。しかし、その中にも新しい友情が芽生え、共に乗り越えた困難が絆となりました。さまざまな不安の中、北欧への留学も実行され、一人ひとりがかけがえない国際経験を積み、帰国しました。

皆さんの卒業は、大学生活において直面した未曾有の試練、そしてそれを乗り越えて得た成長の証です。皆さんが掴んだ知識、磨かれたスキル、そして

築いた人間関係は、これからの人生での貴重な財産となることでしょう。

未来への一歩を踏み出す皆さんには、新たな挑戦、夢、そして目標が待っています。国際教育学科で培ってきた好奇心、探究へのエネルギーを胸に秘め、進むべき未知の道を歩んでください。先が見えないからこそ、自らの力で切り拓く冒険があります。そして、その冒険こそが本当の学びと成長への鍵なのです。

"The world is your oyster." 世界は皆さんの手の中に広がっています。

これからずっと続いて行く人生の探究が、皆さんにとって嬉しい驚きに満ちたものであることを心より願っています。

卒業おめでとうございます。

"This article was written with the assistance of ChatGPT, a language model developed by OpenAI."



物語の続きを

学校教育学科教授
水口 潔

学校教育学科の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんが入学した時は、未曾有のコロナ禍であり、先輩方とはかなり違った学生生活となりました。入学した春の日、20人ずつ窓を全開にした美術棟の教室でよそよそしい雰囲気の中で説明会をしたこと。当たり前のように1405教室に学年全体で集まることができたのは、4年次春のオリエンテーションが初めてであったこと。これまでにない特別な学年として、学年団の担当者として鮮明に心に残っています。皆さんはそれらをも糧にしてこれからの生活に大きな夢を馳せているのではないのでしょうか。

臨床心理学者の河合隼雄は、我々人間は時に、硬直した思考に陥り単純に二者択一的になることで、

一方を否定することになりがちであること。しかし、それは機械のすることであり、人間のすべきことではないと記し、人間が生きるということは、対立するかのように見える厳しさや優しさを、いかにして両立させていくかという努力を続けることであると述べています。皆さんが進むべき時代は、大きな変化が幾重にもなって押し寄せてくることになると思います。硬直することなく、大学時代に得た良き仲間の助けや自身の経験を踏まえて、良き判断、良き選択をして人生の物語を作り上げてください。皆さんのご多幸を心よりお祈り申し上げます。



草原の靴屋

地域社会学科教授
鈴木 健大

中学卒業時の文集に寄せられた、中学3年当時の私の担任でいらした先生のとえ話が忘れられています。

とある靴の販売を営む会社が、草原が広がる海外の国に社員たちを赴任させました。そこはまだ文明が進んでおらず、人々は裸足で生活をしています。ある社員は「こんなところでは、靴が売れるはずがない」と大きく落胆してしまいました。しかし、ほかのある社員は「みんな靴を履いていないので、これはビジネスチャンスだ」と考えました。あなたはどちらの人間ですか。そう問われ、今もお、私の中で問われ続けています。

置かれた環境や襲いかかってきた環境は変えられないかもしれない。でも考え方一つで自身の行動もその未来も私たちの未来も変わっていく。

みなさんが入学された年に、コロナという未曾有

の災害が世界を襲いました。息苦しい時間を過ごさざるを得なかったみなさんも多かったことでしょう。コロナが過ぎ去っても毎日のように、戦争や災害など凄惨な報道が各地から届きます。みなさんは4月から、今度はこれまで学んできたことを実践に移していく番です。そして、みなさんが社会の主役になっていく番です。どうぞみなさんが暮らしやすい社会に塗り替えていってください。逆境であってもチャンスに変えていく、そんなことを軽々とできる可能性をみなさんは秘めています。私たち大人はその姿を見てサポートを惜しみません。どうぞ自信を持って社会で活躍されてください。

ご卒業、ご修了、おめでとうございます。



学ぶとは真実を胸に刻むこと

大学院文学研究科
臨床教育実践学専攻准教授
瓦林 亜希子

大学院修了という門出を迎えた皆さんに、上記の言葉を贈りたい。これは仏の詩人ルイ・アラゴン (Louis Aragon 1897-1982) による「ストラスブール大学の歌」という作品中の「教えるとは共に希望を語ること / 学ぶとは真実を胸に刻むこと」という有名な一節からの引用である。私自身、教育学を学び始めた学生時代にこの言葉に出会い感銘を受けた。第二次大戦中、独に隣接するアルザス地方にあったストラスブール大学が、ナチスからの迫害を受け仏中部に一時移転していた時代に、逆境の中でも教え学び合うことに希望を見出そうと書かれた詩だ。原文は「Enseigner c'est dire espérance, étudier fidélité」となっており、訳によっては「誠実を胸に刻むこと」とするものもあるが、誠実を表す「fidélité」には「事実を曲げないこと」という

意味もあることから、「真実」という言葉が充てられたのだろう。

この2023年3月に卒業する臨床教育実践学専攻の皆さんは、8名という近年では大所帯の同期の人数だった。私の研究室がちょうど院生室の真向かいにあり、この2年間常に皆さんの談笑する声がこちらにも届いており、微笑ましく且つ羨ましく思っていた。学びとは、自分とは異質の他者との対話の中でこそ深まるものであり、そこからそれぞれの「真実」を手繰り寄せ、修士論文という目に見える形に昇華することこそが、研究の過程と成果ではないか。皆さんは、同期の8名でまさに学び合うことで、人間的にも成長し、修士論文という一つの研究的「真実」を掴んだことを、どうか一生の宝とし自身の土台として欲しい。卒業本当におめでとう。



旅立つことば

つながること



国文学科
遠藤 碧海



ゼミ合宿にて

4年間の学生生活を経て、最も強く感じたのは「つながり」でした。私はお世辞にも活動的な生活を送っていたとは言えませんが、それでも、講義やゼミなどを通して、沢山の方と関わる機会をいただきました。人との関わりを持つということは、自分に無い価値観や視点、文化に触れることだと思います。それをどのように自らの糧にするか、触れたことで何を感じ、考えるかが大切なのではないのでしょうか。もちろん、本を読むこと、何かしらの文化に触れることもまた、それらとつながることです。講義の枠を超えて、自分の興味の向くままに本を読み漁ったり、映画鑑賞をしたりして、モノとのつながりを持つことができたのも、大学生の醍醐味でした。そういった人やモノとのつながりから生まれたものを糧に、成長できた4年間だったと思います。

最後になりますが、お世話になった先生方、学生生活を共にした友人達、支えてくださった全ての方々にこの場をお借りして御礼を申し上げます。楽しく、充実した4年間を過ごすことができ、本当に幸せでした。

“Do it for the plot!”



英文学科
吉田 玲香



最高のルーミー達と

It is an honor to have been asked to write this message and share my thoughts to celebrate our graduation. Congratulations to all of you! These past four years as a Tsuru University student were full of adventurous and unforgettable experiences. Starting off freshman year during the pandemic, studying every single day to achieve some of my biggest goals while in university, such as going on an exchange program and spending one year in the US, meeting lots of amazing people from all over the world, and eventually finding out the ultimate goals of my life: these milestones were not always easy. However, all of these experiences taught me countless lessons for my future endeavors. As I wrote in the title “Do it for the plot,” every single thing you encounter is for the unwritten pages in your book. When I struggle with something, I always tell myself, “You only live once, and don’t be afraid of making mistakes.” And I believe it is better to challenge something than to regret not trying.

Lastly, I would like to thank my family, professors, fellow classmates, friends, and those who encouraged me and believed in me during my journey. I believe that this is not the end, this is the beginning of a new chapter in my life. I am excited about what the future holds and will keep trying new things.

繋がりの大切さ



比較文化学科
遠藤 愛



学食と「しえあはび」
のコラボメニュー

私にとって都留文での4年間は、「人との繋がりの大切さ」を心から実感する日々でした。

所属したゼミでは、「多文化共生」と「第三の居場所」を卒論テーマにしました。取材の一環で訪れた「みんな食堂」では、世代を超えて美味しい食事を囲む光景や、ボランティアの方々から聴かせて頂いた熱い思いから、今まで学んできたことの本質に触れることができました。

課外活動では、留学生のチューターや、「アカペラサークル☆☆☆(みつぼし)」、「しえあはび」〈環境や社会問題への関心を皆で気軽にシェアプロジェクトを運営するサークル〉に参加したり、都留の企業「(株) つるにつながる」でインターンをさせて頂いたり、様々な方と繋がることができました。生まれ育った都留市で大学生活を送ったことで、今まで以上にじっくり地域と向き合えたと感じています。春からは、都留を一旦離れますが、大好きなこの場所に恩返しできるよう、大きく成長して帰ってきます。

最後に、支えてくださった地域の皆様や大学関係者の方々、かけがえない時間を共に過ごした友人やサークルの仲間たち、そしていつも温かく見守り続けてくれた家族へ、心から感謝申し上げます。これからもこのご縁を大切に、皆さまとの再会を楽しみにしながら頑張っ参ります。

都留での出会いがくれたもの



国際教育学科
齋藤 美空



サークル学内発表会にて

私の都留での4年間は人との繋がりで成り立っていました。コロナ禍で始まった大学生活は思い描いた通りのスタートではなく、何のためにここにいるのかと自問自答する時もありましたが、そのような日々の中で私の生活を彩ってくれたのは、授業やサークルで出会った友人との時間でした。コロナ禍という環境でも前向きに努力する友人たちと支え合い、刺激し合いながら充実した日々を送ることができました。

また、北欧留学を通して国境を超えた繋がりもできました。様々なバックグラウンドを持つ人々との出会いは新鮮で、毎日新しいことに出会えた半年間はとても刺激的で素晴らしい日々でした。この留学で得たすべての経験は今後も私の中で大きな意味を持つものであると確信しています。

初めてのひとり暮らしに不安を抱いた日、重い課題に苦しんだこと、サークルに熱中した日々、友人とたわいない会話で何時間も盛り上がったこと…思い返せば全てがかけがえない思い出です。春からの生活には不安もありますが、大学での経験を糧にこれからも成長していきたいです。

最後に、4年間ご指導下さった先生方、支えてくれた家族、友人に深く御礼申し上げます。ありがとうございました

出会いに感謝



学校教育学科
矢作 若葉



水口研究室の
愉快的仲間たち

水口先生から「愉快的仲間たちです」と紹介されるほど、毎日笑いが絶えない仲間と過ごした4年間でした。入学当初は新型コロナウイルスの影響で制限が多い毎日でしたが、その中でも数多くの出会いや貴重な経験に恵まれたことに心から感謝しています。小学生の頃から続けてきたソフトテニスも最後の最後まで試合に出させてもらいました。最後にテニスをする場所がここでよかったと胸を張って言える環境でした。一緒に頑張ってきた部員の皆んな、支えてくださった都留の皆さま、本当にありがとうございました。

「沢山のひとと出逢い、沢山学びなさい」という恩師からいただいたことばがあります。周りには魅力ばかりの友人や先生方がいて、学びが溢れるこの場所にいられたことが、何よりも自分の力になったのではないかと感じます。

春からは地元に戻り、恩師に憧れて目指した教職に就きます。ひとつでも多くのことを学び、憧れた姿を目標に日々精進して参ります。最後に、応援し続けてくれた家族や、ユーモア溢れる友人、支えてくださった先生方にこの場を借りて心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

やるしかない



地域社会学科
河田 容延



都留の友人と

「桜咲いてんのに、吹雪いてるやん！」

3月31日の都留のあの光景を見たとき、「とんでもないここにきてもうたなあ」というのが本音でした。でももう卒業。この四年は本当に短かった。もう二年ぐらい学生でいたいですが、社会は許してくれないようです。

パンデミックの影響で「コロナ世代」という呼び方も生まれて久しくなりますが、どこかで「環境を理由に可能性を狭めたくない」という想いを持ち、同じ考えを持つ友人や仲間が居たからこそ今の自分があるのだと思います。

あの時、書類一枚面倒臭がらず提出したから同じ水泳の仲間ができ、お金がなくて留学にいけなけれど原付や青春18きっぷで全国旅行もできた。本当に物は考えようで「こんな環境だから」で可能性を閉ざしてしまうのは勿体無いと知れたことが武器になり、卒業後の道も拓く事ができました。

何度も言いますが、この四年はアッ、、、！という間で、不本意ながら日々起こることにも何かと意味付けないと間に合いませんでした。自由なようで縛られている。これは前田ゼミから学びました。やるしかないんです。

「為せば成る 為さねば成らぬ 成る業を 成らぬと捨つる 人のはかなき」
最後に甲斐の名将、武田信玄の言葉を引用し旅立ちの辞とさせていただきます。

人生で一番学んだ一年間



文学専攻科 教育学専攻
 鱒坂 裕之



学部時代の仲間

都留に来て5年が経ちました。とても自由で楽しい日々を過ごせたと感じています。その中で、自分自身大きく成長をすることができました。特に、専攻科の一年間は自分の人生の中で、一番学ぶことができ、成長できたと思います。

私は楽な方に流されやすく、どのようにサボるかをいつも考えていました。専攻科に入学し、一緒に学ぶ仲間がおらず、全ての授業で先生方と一对一の授業でした。予習や課題、レポート等やることが多く、とても辛かったのですが、やりきることができ、さまざまな学びを得ることができました。

これまで授業など受け身で学んでおり、勉強することが嫌いでしたが、この一年間を通して、主体的に学ぶことの大切さをより実感するとともに、学ぶことにより、自分自身の価値観や世界が広がっていき、学ぶことのおもしろさや楽しさを感じるすることができました。また、論文を書いていく中で、自分で調べ、自分の頭で考えることの難しさも実感しました。

春から長い教員人生が始まりますが、自分自身で学び続けられるよう、子どもたちに学ぶことのおもしろさや楽しさを伝えられるようにしたいです。また、大学で出会った仲間やお世話になった先生に感謝申し上げたいと思います。

修了に際して



大学院文学研究科
 国文学専攻
 津金 伽帆



研究で訪れた「村上春樹
 ライブラリー」にて

振り返れば、大学院での時間は瞬く間に過ぎて行きました。限られた時間の中ではありましたが、国文学はもちろん、自分自身の未熟さとも対峙する時間を過ごしました。その中で得られた知見は、私にとって大きな財産となりました。大学生活を支えてくださった全ての皆さんにお礼申し上げます。

指導教員の古川先生をはじめ、諸先生方に大変お世話になりました。RAやTAを経験する中で、研究や職務に誠実に向き合うことの大切さを学ばせていただきました。今後も、私の生き方の指針となるでしょう。また、今年度は高等学校の非常勤講師として勤務し、多くの課題も見つかりました。改善しようと模索する中で、いつも生徒の反応や言葉が励みとなっていました。新天地でも、謙虚に学ぶ心を忘れずに精進してまいります。

学生生活も終わりを迎えます。修了に際し、6年の月日を過ごした学び舎を離れることへの寂しさを感じずにはられません。学外でも多くの出会いや学びがありました。しかし、春は別れの季節であると同時に、出会いの季節でもあります。今後も自分自身を律し、目の前のことに真摯に取り組みながら、この道を選んで良かったと思える生き方をしてまいります。

「難しさ」や「奥深さ」に触れる

大学院文学研究科
社会学地域社会研究専攻
佐藤 香奈子



夜の都留文

大学卒業後に進学し、「本やPCが常に身近にある」という大学院生活を過ごした。それまでの自分はずっと「スポーツ」をしており、どちらかというとクラブやバットを片手に生きてきた。元々、何かを表現することに苦手意識があったが、堂々と自分の意思を「ことば」として表現できなくても、プレーでそれを代えられるところに救われつつ過ごしてきた。

院生となり、研究をさらに行う身となったが、論文執筆も行う中で特に感じたのは、「自分で『ことば』にしなければならない」ということである。時には誰かの見解を列挙して終わり、時には情報の取捨選択ができず、ただ量を稼ぐように書くなど、「難しさ」を味わった。不器用な人間であったが、学部時代に続きご指導いただいた西尾先生からは、多くの金言をいただき、修士論文をまとめることができた。何気ないと感じていた過去の経験が、気がつけば研究に大きく結びついていた、という「奥深さ」にも出会えた。器用ではないところばかりだが、手に持つものがどんなものであっても、6年間の経験を大切にしていきたい。所属専攻の先生方、院生の皆様をはじめ、ご指導、ご支援いただいた皆様、ありがとうございました。

経験に勝るものはなし

大学院文学研究科
英語英米文学専攻
佐藤 みのり



お世話になった研究室

都留に来てから6年もの月日が経とうとしています。今となってはあっという間の期間で、特に大学院での2年間は充実したものであると同時に、ほんの一瞬の出来事のようにさえ感じます。

私にとって都留は勉学の間であると同時に、かけがえのない経験を与えてくれた場でもあります。学内外問わず、様々な活動に参加してきた私ですが、実のところ入学当初は多くの人と関わることを苦手としていました。そんな私の変化はひとえに都留で出会った仲間たちのおかげです。仲間たちがサークル活動に打ち込む姿、興味のあることを真剣に調べる熱意ある姿に影響を受け、私も何か挑戦してみようと決意することができました。都留を飛び出し、そこで他大学の学生と議論を行ってききましたが、周囲との歴然とした実力差という大きな壁に直面しました。思い返せばその時の経験が私を院進させたのかもしれない。今でも自分の実力不足を感じることはありますが、無知だからこそ学びは魅力的なのだと感じています。

最後にはなりますが、これまで教え導いてくださった先生方、支えてくれた家族や友人、都留で出会った皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

走り抜けた4年間と悩み続けた2年間



大学院文学研究科
比較文化専攻
佐々木 二葉



サークルの同期たちと
桂川祭にて
(2019年、大学2年生)

1年の浪人生活を経て大学に入学した私は、待ちに待った大学生活を無駄にしたいという思いから、学部生時代は勉強、サークル、アルバイトで4年間を走り抜けました。友人たちと、流星群が見られる日はグラウンドで空を見上げたり、あてもなく深夜の都留を語りながら歩いたり、そんなあたたかい思い出が今でも私の心に刻まれています。

学部の4年間は、自分の世界が広がるのが嬉しかったのを覚えています。しかし、大学院の2年間では学ばば学ぶほど自分の価値観と向き合い続ける勇気をなくし、答えのない問いについて考え続けることから逃げ出したいということもありました。大学院での生活を全力で走り抜けることができなかったという思いは残りますが、大学院に進学したことには後悔はありません。これまでの人生で一番迷いや葛藤があったこの2年間、丁寧なご指導を賜りました指導教官の山本芳美先生には大変感謝しております。また、授業を通して支えていただいた先生方、励まし合いながら院生生活を共にした比較文化専攻の同期や後輩たちの存在にもいつも助けられていました。都留での6年間に胸に、4月からは日本語教師として働きます。これからも、学びを通して自分と向き合い続けることを恐れずに人生を歩んでいきたいと思います。本当にありがとうございました。

20時、オギノ集合で。



大学院文学研究科
臨床教育実践学専攻
牧野 諒太



河口湖紅葉まつりにて

2022年春、3学科7研究室から集まった私たちは、教育学を修めようという清らかで猛々しい表情とともに、少し、いやしかし確実に不安と緊張を共有していました。ところが、この頃は予想だにしない2年間が展開されました。

タイトルの言葉は、私たちの仲の深さを示すと同時に、並々ならぬ努力の証でもあります。私たちは日中、講義や研究指導を受けたり、仕事をこなしたりと、個々のなすべきことに励みました。とりわけ、研究指導はしばしば長時間にわたり、あるテーマを修める苦しさを味わうこともありました。しかし、大学院生活の支えとなったのは、紛れもなく同期との関わりでした。院生室で始まった議論が飲み場に持ち込まれたり、苦しさゆえに愚痴をこぼしたり、私たちだけの関係性のなかで、私たちにしかできないやり方で支え合い、2年間を過ごしました。——20時、オギノ集合で。——真面目に研究と向き合い、支え合ってきた私たちだけの合い言葉です。

最後に、学問を継続させてくれた両親をはじめ、先生方や先輩、後輩たちには心より感謝申し上げます。そして、同期に問います。次は何時に、どこ集合ですか。教師仲間へと変容する私たちの物語の続きを、早く見たいものです。

令和5年度 卒業論文・研究論文・修士論文題目

氏名表記については、原則本学学内システムで使用する「Unicode (UFI-8)」で表示可能な文字で表記しています。

国文学科

上代文学

小村 宏史ゼミ

- 内田 光南 上代文学における鳥—『古事記』を中心に—
岡本 梨愛 稲羽の素菟考
笠井 優華 万葉集の「恋」と「孤悲」
小梁 皓留 万葉集巻七「月を詠む」の解釈と構造
小山 なな 『古事記』における八咫遠呂智
佐藤 実優 古事記におけるヤマトタケルの人物像—日本書紀と比較して—
篠原由美子 古代日本における靈魂観の成立と受容—本田霊学から見るミタマという概念—
杉本 美波 『万葉集』相聞歌における「月」
関 稀子 上代文学における白
美宅 紗和 『古事記』における「見るな」の禁忌の立ち位置について
山野日向子 『古事記』国生み神話における天沼矛
吉川はるえ 日本神話における月読命と月信仰
吉原 萌華 『古事記』における黄泉国・根之堅州国

中古文学

長瀬 由美ゼミ

- 佐藤菜々美 『源氏物語』における「予言」考
清水 まゆ 平安時代の七月七日
太田 文華 『枕草子』「春はあけぼの」章段における表現技法について
大友 陽加 『源氏物語』における夢
北村 杏奈 『落窪物語』に描かれた結婚
小坂 志保 『源氏物語』の「月」考
今野 太禎 中古文学における乳母の持つ影響力
坂口 妃那 『源氏物語』の香りとその効果
佐久間 萌 『蜻蛉日記』の形成と源泉
櫻田 深月 『源氏物語』に關係する紫
島田 佳愛 『源氏物語』における玉鬘の人物造型
朱 治純 『源氏物語』における弘徽殿太后の生成と作品内での役割
平井貴世子 『源氏物語』における女性登場人物の出家について
森 菜摘 『源氏物語』における美的表現
山口 志津 『源氏物語』における神仙思想—その内容と周囲の受容から—

中世文学

佐藤 明浩ゼミ

- 小俣 歩美 擬作としての『撰集抄』
坂元 萌恵 光源氏の潜在王権と三人の天皇
上田 陽由 藤原道綱母「なげきつつ」歌の詠作事情
江村奈都子 『為忠家両度百首』に於ける題詠の様相
桑原 一葵 『発心集』における執着の特徴について
小林 萌衣 和泉式部和歌の特徴—『後拾遺和歌集』所収歌を中心に—
佐藤日向野 「本旨待機」の構造を取る『新古今和歌集』の恋歌について

- 下澤 賢吾 『平家物語』における「死」
武居 萌果 『金槐和歌集』における源実朝の和歌表現について
田代 愛 『小倉百人一首』と『百人秀歌』における本文異同
土橋 実季 説話文学における「猿」と「蛇」
内藤 響生 『伊勢物語』における月についての考察
飯藤 玲也 『今昔物語集』巻二十第三 考
日原由萌香 『玉水物語』からみる中世における狐の在り方について
丸山 直海 中世勅撰和歌集における桜の詠まれ方

近世文学

加藤 敦子ゼミ

- 河野 帆香 『文武二道万石通』論—改刻の検証と他作品との比較を通じて—
謝 斯成 『江戸生艶気樺焼』考—読売に注目して
水上 真維 『怪談名香富貴玉』巻四—二「稲村新蔵、弘師を討取事」考—信田妻ものと比較しながら—
山田 絢子 説経節「かるかや」物における唱導性と物語性—表現の変遷と語り手の背景に着目して

近代文学

古川 裕佳ゼミ

- 竹居 優佳 折口信夫『死者の書』考
藤田 樹 安部公房『他人の顔』論
八木 春香 坂口安吾論
酒本 竜輔 伊藤野枝「乞食の名誉」論
天野 岳 深沢七郎「風流夢譚」論
天野 弥祐 森鷗外『うたかたの記』論
金敷 紗弥 山川方夫『親しい友人たち』論
作田 陽奈 芥川龍之介「アグニの神」論
城倉 綸 坂口安吾「真珠」論
西川 歩花 堀辰雄「聖家族」論
番田 栞 黒島伝治「渦巻ける鳥の群」論
吉村 晴陽 横溝正史論—『黒猫亭事件』を中心に—
渡邊 緋夏 福永武彦『草の花』論

近代文学

野口 哲也ゼミ

- 江口 寧音 小川未明「赤い蠟燭と人魚」論—愛と怒りの行方—
遠藤 碧海 芥川龍之介「地獄変」論—無辜の死からなる芸術—
大洞 花笑 谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のをんな」論—母と魔性と老い—
木下 樹 信仰の再解釈—遠藤周作『沈黙』論—
佐藤 由梨 谷崎潤一郎「痴人の愛」論—虚構の西洋における夫婦—
下村 雪 北村透谷『蓬萊曲』論—内部世界の出現とその挫折—

高谷 莉子 谷崎潤一郎「魔術師」論—文化を取り巻く人々—
 田中 尚人 声と幻視—折口信夫『死者の書』論—
 富安 真央 谷崎潤一郎「春琴抄」論—重層化される視点と永遠の女性像—
 増田 あこ 横光利一「蠅」論—空虚への収束—
 宮坂 菜愛 夏目漱石『心』論—エゴイズムの帰結と殉死—
 毛利 唯菜 三島由紀夫『鏡子の家』論—廃墟への未練—

近代文学 吉田 恵理ゼミ

池端 晴子 村田沙耶香作品における「正常」—「コンビニ人間」を中心に
 石橋 慧菜 夢野久作『ドグラ・マグラ』における「精神」—同時代の精神医学に関連づけて
 佐藤 優美 石垣りん詩における〈食〉
 鈴木 優伽 寺山修司『毛皮のマリー』における「変装」
 須藤 花菜 小川未明童話における〈移動〉
 田沼 愛珠 風良ゆう BL 小説における恋愛と家族
 千田 洋平 坂元裕二『大豆田とわ子と三人の元夫』における〈雑談〉と〈脱家族〉コミュニティ
 名嘉 敦希 〈愛〉と〈拒絶〉の関係性—最果タヒ詩論
 中村 真維 中原中也「月の光」論—ヴェルレーヌと中也の月下世界
 堀部 双葉 辻村深月『冷たい校舎の時は止まる』論—成長しない生徒たちと学校空間
 増淵 千星 森見登美彦『熱帯』論—小説をめぐる小説について—
 山下 優寿 朝井リョウ作品における「多様性」と「性」の正しさ—『正欲』を中心に

国語学古代語 加藤 浩司ゼミ

大倉 夢美 文学作品における会話主の特定方法
 齋藤 千智 『今昔物語集』における「寝」「ふす」「眠る」の意味・使い分けについての考察
 鈴木 雪愛 「あかし」等の「赤」または「明」を意味として含む語について
 武 遥奈 原形動詞と「ふ」付き動詞の比較から考える接辞「ふ」
 中村 瀬七 「イデル」「イダス」から「デル」「ダス」への変化について
 中村 柚希 「拱」の日本における訓と意味の歴史的变化
 藤平 美奏 「たづねる」の意味の歴史的变化について
 三村 真子 清和源氏の男性漢字名における「系字」「通字」の検証
 宮岡 武 「罪」を表わす語の変遷
 菅原 真子 古代日本語における二人称について

国語学近代語 早野 慎吾ゼミ

金城 碧希 沖縄の言語景観—観光資源としての沖縄方言—
 五十嵐沙紀 東京のコミック景観における演出研究
 岡田 純音 A study on Modifier in Japanese Simile Comprehension (日本語直喩の理解における修飾句の研究)
 黒川木の香 テレビドラマにおける同意要求表現ジャンナイの研究—『カルテット』を例に—
 鈴木 愛菜 豊島区南長崎マンガランド事業—トキワ荘によるまちづくり—

財部 想 鹿児島県方言のアクセント研究—世代差を中心として—
 中島 望結 外国人児童生徒の教科書語彙理解度に関する研究—外国人児童生徒と留学生の比較から—
 古田 隆道 江戸情緒を残す浅草の言語景観
 水井 果恋 国重要無形民俗文化財・西川古柳座における伝統芸能の継承
 三觜 樹 サブカルチャーを活用した言語景観—アキバと乙女ロードを中心として—
 山本 和奏 マンガの性的表現におけるオノマトペ研究—BL 作品を中心に—
 依田 鈴菜 古館春一作『ハイキュー!!』のオノマトペの特徴—「静」と「動」の対比から—
 渡邊 晴香 マンガ・キャラクターの性格と言語表現に関する考察—マンガ『新世紀エヴァンゲリオン』の女性キャラクターについて—

漢文学 寺門 日出男ゼミ

大村 野乃 朱子学における『孟子』
 熊谷 玄勢 本居宣長と老荘思想
 照内 琴葉 荻生徂徠の『絶句解』について

国語教育学 野中 潤ゼミ

小林真奈香 インクルーシブ教育における「通級による指導」の意義と実践について
 佐野 日和 高等学校国語科における小倉百人一首を教材化することの有用性
 昔農 理沙 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』を教材とした中学校国語科授業の研究
 竹本 菜央 国語科教育における読書の有用性—読書感想文を事例に—
 田中 沙奈 サンボマスターの歌詞の教材化—歌詞を用いた詩教育とアドラー心理学の融合—
 田村 岳杜 ChatGPTがもたらす国語科教育への有用性
 野尻 大介 教育の公正を追求する国語科—インクルーシブ教育の視点から—
 福原 裕太 インクルーシブな国語科教育の実現に向けた課題—「伝え合う力」を中心に—
 松田 夢 進化するAIと国語教育のこれから—探究学習の視点から—
 丸山 結菜 自己肯定感を高める中学国語「書くこと」
 安村 咲希・山口 泰葉 映画『千と千尋の神隠し』の教材化について

日本文化 菊池 有希ゼミ

雨宮 知己 三好達治の詩篇「鷗」と木下牧子作曲の合唱曲《鷗》の比較
 池上 雛姫 古屋信子『三つの花』からみる少女たちへのメッセージ—家制度とルイーザ・メイ・オルコット『若草物語』の受容—
 小野寺志織 三島由紀夫「愛の処刑」「憂国」における切腹表象について—『奇譚クラブ』との関連から
 JIANG SILONG 芥川龍之介の「支那趣味」—『支那遊記』を中心に
 高橋 歩 太宰治「ヴィヨンの妻」におけるフランソワ・ヴィヨン受容と家庭像の再構築—「人間失格」との比較を通して—

高橋 祐海 江戸川乱歩の探偵小説におけるポー受容—『屋根裏の散歩者』を中心として—
 武井 陽菜 宮沢賢治における『不思議の国のアリス』のナンセンス受容—「山男の四月」から『注文の多い料理店』へ—
 田村 郁実 探偵小説としての『二重心臓』—夢野久作のエドガー・アラン・ポー『The Tell-Tale Heart』受容—

成瀬 雄規 安岡章太郎作品における日本のアメリカ化
 芳賀 真夕 芥川龍之介の日本近代化への眼差し—「舞踏会」を中心に—
 三浦 遙 「夢十夜」に見る夏目漱石の〈日本の近代化〉観

英文学科

加藤 めぐみ・田中 みんなゼミ

紀平あかね ウィリアム・モリスの思想 - 『ユートピアだより』を読む -
 齊藤 綾乃 『わたしを離さないで』の主人公たちはなぜ、使命に抵抗しないのか
 飯島 彩花 『不思議の国のアリス』から見る児童文学の社会的位置づけ
 今村 朱里 16・17世紀イギリスにおける異性装
 及川 莉奈 Romeo and Julietにおける愛の悲劇の原因について
 後藤 嶺奈 セクシャルマイノリティへの受容の在り方
 小松 茉乃 ジェイン・オースティン作品から見るジェントリ階級
 瀬上 花帆 『高慢と偏見』から見るそれぞれの結婚とジェイン・オースティンの結婚観
 松田 麗 「結婚」にみるシャーロック・ホームズ
 谷内 星音 「ディズニー版『アリス』の世界観の表現とその背景」
 山田 友羽 『クララとお日さま』から見るケアの在り方
 渡邊 杏奈 ヴァージニア・ウルフ『自分ひとりの部屋』が現代に残すメッセージ

小室 龍之介ゼミ

石川 将 シャーロック・ホームズのジェンダー観
 大塚 知紗 イギリスと日本から見る幻想生物の存在意義について
 奥崎 光 『タイムマシン』から見る19世紀のイギリス
 栗田 彩加 ハリーポッターと誕生の秘密 - J.K. ローリングの生き方 -
 桑名 遥香 イギリスサッカーでみるフーリガニズム - カルチュラル・スタディーズの視点から -
 佐々木華衣 『動物農場』における政治的メタファー
 松本 茉優 ウィリアム・ゴールディングの『蠅の王』で見る社会心理学

儀部 直樹ゼミ

前田 萌絵 ミッチ・アルボム作品と死後の世界について
 市川いろは 大学生の自殺から考える明日を生きる方法の模索
 今井菜々子 『モリー先生との火曜日』における生きがい論
 大西 彩加 死生観から考える どうして自殺はいけないのか
 長田沙緒利 文学作品における児童の死生観

柏木 陸 青年期の人生計画
 櫻井 花音 家庭の温もり：養育環境の自己肯定感と愛着障害への深遠な影響と家族愛の意味
 竹山美結花 ジェンダーと家族愛：19世紀から20世紀アメリカ文学におけるジェンダー役割と家族関係の探究
 兵道 達也 生きがい論と自己実現 - ミッチ・アルボム作品を通して -
 安田修一郎 現世と霊界の旅 ~ 「タナトフォビア (死恐怖症)」の軽減を目指して~
 来丸彩也香 View of life and death and love in Disney works
 渡邊 茜 遠隔教育が発達しても、学校に通う意義とは何か - コロナ禍の教育現場やミッチ・アルボム作品を通じて明らかにする1つの解答
 渡辺葵里乃 映画『生きる』に見る、死に直面した人間の思考と行動 - 死をどう受け止めるか -

竹島 達也ゼミ

砂場 晴月 Native Son から見る社会的弱者の捉える社会
 辰田 舜 果物とカタワレ『君の名前で僕を呼んで』のメタファーをめぐって
 金谷 太誠 現代社会における孤独とつながりの希求 - *The Zoo Story* と *The Catcher in the Rye* からの考察
 小林 由奈 Paula Vogel が描く「不可視の暴力」 - *How I Learned to Drive*, *The Mineola Twins* を巡って -
 齊藤 優美 *The Inheritance* における連帯の重要性 - 今を生きるマイノリティと過去とのつながり
 平 愛結 *Dear Evan Hansen* と *The Circle* から考える SNS との付き合い方
 田中 明依 *The Bluest Eye* から読み解く黒人女性への差別
 中井 美希 アメリカにおけるテクノロジーと人間社会 - *The Adding Machine* と *Death of a Salesman* と *Dear Evan Hansen* の場合

中地 幸ゼミ

土田 智子 *The Bluest Eye* における人種意識について
 稲垣奈那未 *Passing* にみられる1920年代アメリカ人種構造
 狐塚 彬豊 アリス・ウォーカーの *Meridian* における人種差別と社会的変革
 郷間 海輝 黒人小説とパッシング
 佐野 飛向 スポーツ界で行われた黒人差別 - ブラックパワーサリュートを中心に
 柴崎 有望 *The Color Purple* における抑圧からの解放

鈴木 愛理	ウォルトディズニー作品から見るマイノリティ差別と現代社会が重視すること
瀬戸 智也	マルコム X の精神形成
丹代 帆風	<i>Song of Solomon</i> における抑圧とアイデンティティの形成
西口 愛結	<i>Looking Like the Enemy</i> が描く日系アメリカ人
野中 星里	フレデリック・ダグラスの奴隷制経験記を通して
野村 唯花	<i>The Bluest Eye</i> から読み取る黒人差別
藤江 潤名	黒人差別の視点から考えるハリウッド映画
松本 紗綾	Passing と PlumBun における混血黒人のアイデンティティ形成

鷺 直仁ゼミ

有坂 日和	19 世紀におけるロマン主義と写実主義の特徴とそれらが与えた芸術表現への影響
有嶋 泰治	印象派と写実主義の比較研究 クロード・モネとギュスターヴ・クールベ
伊藤 大斗	イギリスにおけるロマン主義の興りと画題の変化
遠藤 潮里	オランダ黄金時代から見るヨハネス・フェルメールの生涯と作品
尾形 知世	ラファエル前派の誕生から確立
小畑 樹稀	西洋における絵画と音楽の関係性
古謝 雄飛	ウィリアム・ハントの『良心の目覚め』と女性の権利向上
志喜屋美心	EU とイギリス離脱、日本とのかかわりについて
千代亜華音	ラファエル前派と唯美主義
早川日菜子	シメオン・ソロモンの作品における男性の女性的表現
二村香奈子	西洋美術における天使の描かれ方
間宮万由花	19 世紀におけるラファエル前派と印象派の比較
丸山 大樹	日本と海外の「生」に対する考え方の違いについて
柳原かんな	宗教革命とバロック美術

高橋 寛ゼミ

杉野 巧	外国語学習における個人差について
鈴木 愛斗	英語における未来表現について - 英語教育の観点を中心に -
武田 純奈	日本語と英語の人称代名詞の比較と分析
千葉 一矢	日英における音象徴の仮説推論能力の差異についての研究
兵藤 里沙	Metalinguistic Negation 英語の「メタ言語否定」について
丸岡 舞子	V-ing 形の性質について - 学校英文法における分類の考察 -
水口 雅登	It 分裂文の "that" の品詞について

Gillies, Hamish Edward ゼミ

玉置 佑多	Motivation in the acquisition of a second language
東恩納千春	The effect of study abroad experience on L2 communication apprehension among Japanese learners of English
古谷 洸貴	Why is Hawaii so beloved by the Japanese?

池田 裕香	Differences in how to praise students between non-native English speaking teachers and native English speaking teachers, and suggestions to improve non-native English teacher's use of praising
門脇 帆音	Correlation between willingness to participate in music and English class, and self-confidence
布川 陽菜	Factors of demotivation for junior high school learners of English
野田 騎希	Toward improving motivation to learn English - The relationship between teachers and students
服部 小雪	Differences between Japanese and foreign youth in the use of Kawaii
本間 晶帆	What is the best motivation for second language acquisition?
望月 駿佑	Influence on English learning understanding by using pictures and video
山下 千弘	How do the new curriculum guidelines affect learner motivation?
山田千笑莉	A motivational case study

OLAGBOYEGA, Kolawole Waziri ゼミ

佐藤世梨亜	A Comparative Study of English Pronunciations Between Korean and Japanese English Speakers
高橋 花音	Second Language Acquisition : The Relationship between Second Language Acquisition and Age
米田 優斗	Effective Methods of Teaching Japanese to Foreigners
阿部 李紗	Second Language Acquisition - The Acquisition of Japanese by Foreigners -
大間知穂菜	Social Class, Age and Language Differences in Japan A Case Study
小笠原笑菜	The Effects of the Environment on the Development of Adolescents
小野 隼	The Origin and Consequences of African American Vernacular English
月居 紅亜	Morphological Differences between Old English and Modern English
水野 笑香	Sociolinguistics - Language and Sex -
星野 遥輝	A Comparative Corpus Linguistics Analyses of Inner and Expanding Circle Englishes

三浦 幸子ゼミ

井上 栞	Effects of Screen Media on Children's Vocabulary Acquisition
田中 綾夏	Implementing Collaborative Writing in High School English Classrooms in Japan
大久保太郎	Effects of Culture on Language : How Language may Affect the Way Humans Perceive the World
大山 倅正	An Analysis of Speaking Activities in Authorized English Textbooks
佐藤 真衣	Applying CLIL to High School English Classrooms in Japan
大坊 有紀	The Relationship between the Effectiveness of Oral Corrective Feedback and Learner's Proficiency Levels in a Japanese Classroom
高島 幸平	Exploring the Concept of Happiness and Cultural Differences
永井 聖也	The Effectiveness of Instructing Core Meaning on Vocabulary Development

- 永野 光 The Analysis of Test Factors in Writing Tests of Japanese Public University Entrance Examinations
- 中村 龍太 The Demand of Japan's English Education in Globalized Age : Focusing on Foreign Language Education Policy
- 山上 詩穂 Effectiveness of Instructing Metacognitive Strategies on English Listening Comprehension
- 吉田 玲香 How to Teach Race in Schools in the US: Shaping Culturally Inclusive Schools through Multicultural Education

加太 康孝ゼミ

- 蒲生 愛夏 The Notebook における恋愛の障壁の作用 - ノアとアリーの身分違いの恋 -
- 藤江 ケイティ アーン The Party and Frock Consciousness : Fashion in Virginia Woolf's Mrs. Dalloway
- 石田 莉子 19 世紀イギリスの非西洋に対するまなざし - パートン版『千夜一夜物語』に登場する動物の描写と女性の社会的役割
- 伊藤 夢華 「呼びかける」ことに危険は伴わないのか - エイズアクティビズムの功績の裏にある排除性に着目して -
- 大井甫乃佳 Cathy/Kate は East of Eden において「汚点」なのか - スタインベックの造形する女性人物 -
- 川俣 明理 A Dog of Flanders 及びアニメ版『フランダーズの犬』に見るマイノリティー - 犬と女性の権利向上と作品の変貌
- 高橋 愛依 ムーランやモアナたちが追い求める「本当の自分」 - 21 世紀を生きるディズニープリンセスの変化
- 滝田 想 ラディスローを選んだのはなぜか - ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』におけるドロシアの 2 度の結婚
- 田中 里佳 男と黒猫を分断する壁の崩壊 - 1820 ~ 40 年代ポー作品に表れる南部の奴隷制存廃問題
- 堀内 莉子 個人が「ただ結びつく」ことを妨げる要因とは - A Passage to India に描かれるマイノリティーのあり方

渡部 直也ゼミ

- 伊藤 七彩 大阪府・兵庫県における母語教育について
- 伊藤 百音 ナラティブな英文ライティング力における調査 - ディスコースマーカーに着目した教授法 -
- 勝田 瑠奈 小学校外国語教育における副教材と CLIL の可能性
- 梅村 雄一 英語のバリエーションが高校生の英語学習に与える影響
- 大清水寛生 第二言語習得におけるタスク中心教授法の適切なアプローチについての考察
- 佐野 綾香 外国にルーツを持つ生徒の英語教育の現状と課題
- 澤口 真由 リスニング力向上のためのシャドーイングトレーニングによる効果について
- 山崎 拓未 英語学習者のモチベーションに対するポップカルチャーの作用

社会学科

現代社会専攻

生涯学習論 富永 貴公ゼミ

- 菱川 里奈 読書がもたらす心理的ケアについて

公共政策論 高橋 洋ゼミ

- 後久 敦 クールジャパン戦略の政策評価—クールジャパン機構の失敗から考察する産業政策の在り方—

比較文化学科

伊香 俊哉ゼミ

- 川端 浩平 現代日本における教科書問題と歴史認識
篠原 茉里 第一次近衛内閣期における広田外交の分析と戦争責任
鈴木 裕大 第一次、第二次世界大戦期の ABC 兵器と科学者
田原明日佳 第二次世界大戦期の抑留者 —在米日系人を中心に—
陳 琳琳 満州移民とは何だったのか
鳥井 楓 太平洋戦争期の『少年倶楽部』の影響考
宮本幸太郎 第二次世界大戦期のナチスドイツと日本におけるプロパガンダ研究
武藤明日香 戦後初期における日本女性の諸相
YUE XIAO スペイン内戦における民族衝突—バスクとカタルーニャの地域的アイデンティティとその影響

青木 深ゼミ

- HAN HYEJU 日韓文化交流における K-POP と日本アニメの比較研究—アイドル「SEVENTEEN」と映画『THE FIRST SLAM DUNK』
青島 瞳 資生堂 CM 1961-1999—杉山登志と桜井順
阿部 元哉 ポーカロイド楽曲における映像表現—作品の諸類型
伊藤さくら インタビュー調査から読み取る 2.5 次元ミュージカルのファン行動
大西 空奈 現代の四国遍路における個人接待
神谷ひかる 「推し活」研究—2 次元のアイドルと 3 次元のアイドル
川上 千東 岡山の映画文化 1990-2023
熊谷 采和 ご当地アイドルと地域振興—気仙沼市の SCKGIRLS の活動を中心に
黒田 美歌 地域振興における博物館の役割—富山県を事例に
土屋 麻琴 映画におけるろう者
中村 優香 アマチュアリズムから考える「歌ってみた」
村井 陸 平成 J-POP の歌詞から紐解く日本社会
森脇 翔栄 日本の捕鯨文化—商業捕鯨モラトリアム前後を比較して

山本 芳美ゼミ

- 及川 もね 近代日本における「家庭料理=愛情論」の変遷—『きょうの料理』の分析から—
飯塚 友恵 洗濯機の静音性能と 1980 年代以降における消費者の変化
君島 直 現代日本における校則・生徒指導の実態—静岡県富士宮市内の高等学校における校則の調査から—
熊谷圭太郎 人形道祖神の民俗学—岩手県西和賀町の事例の検討—
酒井 唯実 外国につながる子供の教育—不就学とその要因の分析—
高橋 葵 現代日本社会における「彫る」と「塗る」の意識の違い

- 中森 理子 現代日本社会でモノを供養すること—針供養を中心に—
水上 亜咲 地方農村における祭事の伝承の変化—富山県砺波市庄川町庄地区（旧雄神村地区）における獅子舞演舞伝承の風景から—
森谷 結衣 日本における二重まふたとメディアの関係—映画・雑誌を中心に—
湯本進太郎 長野県伊那市における昆虫食文化—聞き書きを基に—

邊 英浩ゼミ

- 河本 祥容 教育からみた在日韓国人
會澤 侑太 日本における移民の定住化と地域社会
岩崎 夏音 日韓におけるルッキズム
大石 創太 若者世代における選挙と投票率
神谷沙和香 ジャニーズ事務所と海外進出—韓国アイドルとの比較を通して—
高 殷英 転職活動に見る日韓比較—他先進国の制度の比較も踏まえて—
小林 美貴 刑法 39 条（心神喪失及び心神耗弱）についての比較とその在り方についての考察
種田 彩優 日韓における「美」の概念—美容整形手術を通して見えてくるもの—
林 龍志 ダイナミック K-POP と J-POP
三上 雄大 地域活性化における行政イニシアチブ
楊 芋蔚 中国における中央集権的政治体制の発展史
吉田 奈未 日本社会と女性の社会進出

水野 光朗ゼミ

- 金森 穂香 葬式今昔
北村 菜柚 音楽フェスの現状と課題
鈴木あかり 日本における声優業界の変遷と今後の課題
田底 真依 日本の食について
西部 遥哉 ファストファッションについて
星 敢太 ヒッピーについて

内山 史子ゼミ

- 田上 愛恵 現代インドネシアにおける政治と宗教のかかわり
PARK JONGHUN 1980 年代、ミャンマーの民主化運動と韓国民主化運動の比較
牛田 綾音 ベトナムが持続可能な観光を進めていくには—サパ地域における急激な観光開発から考える—
柿崎 渚 東南アジアにおける都市化と住居問題
茅場 道 インドネシアにおける排他的ムスリムと多元主義的ムスリムの誕生の過程
坂本 明吉 中国音韻学から見る中国語の発音変化と特徴
鈴木 南緒 東南アジアにおける女性の性的人身取引と日本の関わり
瀬戸恵理沙 インドネシアにおけるムスリム女性のスカーフ着用

谷本 玖凜	カンボジア農村部における経済格差と貧困の実態
趙 睿	権威主義体制下の長期政権と生存戦略 — ミャンマーにおける軍事政権の指導原理の分析—
松浦 来実	カンボジアの貧困と教育状況

野村 佳世ゼミ

城間 優太	「お笑い」における差別的表現の境界線
阿部 日葵	「時代の廻行」に魅了されるアメリカ—アメリカ史から分析する排外主義の本質
大山 祐輝	日本における「移動する子ども」の教育支援体制—英国の事例に注目して
河上 優莉	フランス郊外に住むマグレブ系移民第2世代の社会的排除
北野 由菜	多文化主義国家カナダにおける文化継承—日系人に焦点を当てて
辻野 椰古	ドイツ社会に内在する排外主義—ホロコースト否定論に着目して
宮澤 由菜	BLM運動にみるアメリカの人種問題—メディアの変化からわかる再生産される差別社会
谷口 真珠	外国人就労に伴う日本語教育の在り方—「特定技能」移行にみる「日本語学校」の位置付け
湯浅 和奏	社会住宅はソーシャルミックスの一助となるか—現代フランスにおける現状と可能性
吉田 祥子	多文化国家ベルギーの文化葛藤—フランデレン地域主義の台頭に注目して
李 闊	アメリカ合衆国におけるアジア人ヘイトの発生と原因の分析
和田すず子	ナショナリズムの攻防—カタール—ニヤ独立運動を問う

上野 貴彦ゼミ

桶田夕月菜	越境するポーランド・ナショナリズム—戦間期フランスにおける移民政策下のポーランド・コミュニティ
今野 雄大	「密造」と「密航」のあいだ—1950年代における「密造品」言説の変遷に注目して—
天野 真尋	日本社会におけるアイヌ差別 —マイクロアグレッションに焦点をあてて—
入之内和徳	外国人生徒に対する日本の学校制度の問題とその現状—外国人生徒が多い都市を比較して
岩瀬 尚希	観光は空き家を救うか 知名度の異なる自治体の関係人口増加政策の比較から
遠藤 愛	サードプレイスからの多文化共生—東京都新宿区における諸アクターの連携に注目して—
作田湧汰郎	「武器」としての移民 —現代リビアと周辺国の関係に注目して—
鈴木 瑛歩	直接民主制と移民
高橋 溪太	バナナ共和国の搾取構造とアメリカ移民—中米諸国を比較して—
間方 優希	「言語的に多様な親」と行政 —外国人定住家庭の異なる自治体を比較して—

山越 英嗣ゼミ

庄子 彩花	エコツーリズムの役割—ピッキオを事例に
初鳥 涼葉	アルコール飲料広告の女性表象からみる女性の飲酒行動の変化
八月朔日風真	日本と世界各国との比較から見出す日本の難民受け入れの課題と展望
水田 香河	ニュージーランドにおける住居問題と貧困—原因と解決策の探究
池川 萌	劇団四季による作品主義とファン行動
今泉凜々香	近年の日本におけるアイドルオタクの推し活—消費形推し活と生産型推し活の比較と多様性の背景
大野 由理	日本における昆虫食文化の伝播とメディアの関連性
片野 好栄	『美少女戦士セーラームーン』におけるジェンダーの二面性
岸本みなみ	ヴィーガン主義の普及と社会的影響
合田 橘花	日本の都市における宗教行事の意義の変容—新居浜太鼓祭りを事例として
高野 結子	ウルトラシリーズにおけるヒーロー像の変遷
高柳里佳子	文化資源としての「遠野物語」
戸塚 のの	外国人技能実習制度から考える共生社会の実現
中村美有羽	ジブリ映画の現実社会とファンタジー
成田 梨紗	地域文化と観光の関係性—ガマの油売り口上を事例として
町田 光琉	メディアが自殺者に及ぼす力
山田 美侑	日本におけるハーフの人々が抱えるアイデンティティの葛藤

齊藤 みどりゼミ

野田あさと	新たな共同体を作る—拡張家族としてのシェアハウス—
青木 晨馬	奴隷制の中で生きる人々の視点 —スレイヴ・ナラティブを中心に—
安達 李緒	Orientalism in Agatha Christie's <i>Death on the Nile</i> (アガサ・クリスティの『ナイルに死す』からみるオリエンタリズム)
足立 瞳奈	日本の女性アイドルグループ楽曲の人称からみるジェンダー考察
石田万里奈	西洋文学における女性像とイランの女性 —アーザル・ナフィーシー『テヘランでロリータを読む』再考—
大島 優佳	中国におけるプロマンスドラマの誕生と文化統制
佐藤 智遥	太宰治作品における薬物の影響
佐藤 奈美	女性アイドルにみる理想の女性像の変遷
滝田 尚弥	江戸川乱歩とエドガー・アラン・ポーの比較から見る日本のおどろおどろしさ
原田 莉子	『約束のネバーランド』からみるジェンダー論—イギリス児童文学を通して—
松山 凌太	筋肉をつけすぎた女性は女性らしくないのか—ボディビルから考察される「女性らしさ」とは—
丸岡のどか	『僕のヒーローアカデミア』におけるヒーロー像
山本多香良	湿地と島の文学論 —アイスランド現代小説を中心に—

佐藤 裕・汪 牧耘ゼミ

- 湊 翠佳 フィリピンでの輸出用バナナ産業における生産労働者への構造的搾取—その要因の形成と変遷—
- 大野 千緒 原子力開発地域住民の「被害者」か「共犯者」のイメージを超えて—ある六ヶ所村住民の語りから住民像をとらえ直す—
- 土田向夏花 教育へのアクセスが阻まれるのはなぜか—インドネシアにおける障がい児教育の課題—
- 虎谷 菜子 外交政策としての政府開発援助—アイルランドのジェンダー平等支援に着目して—
- 渡邊 杏柚 脱産業社会における高専の存在意義—高等教育機関の序列化をてがかりに—
- 片野真由子 「農村花嫁」の受け入れから定住へ—山形県鶴岡市・戸沢村における行政と地域社会の役割—
- 志村 澄加 開発独裁下の韓国における工業化と低賃金労働—ジェンダーの視点から「漢江の奇跡」を再考する—
- 諏訪 桃子 性売買を持続させる要因—韓国における性売買防止法と女性当事者団体に着目して—
- 高木 帆月 山梨県の高尾産物産業にみる文化保存の変遷について—都留・富士吉田地域を中心に—
- CHEN JIAXIN 中国の人気ゲームにおける女性表象の変遷—「王者栄耀」の事例からの—考察—
- 長葭 夏海 古着をめぐる言説の変遷—日本の新聞報道をめぐる批判的考察—
- LI JUNYI 中国の代理出産はいかにあるか—女性の身体をとりまく政府と社会の関係性—

岸 清香ゼミ

- 北山 一輝 祭りがつくる共同性—上越謙信公祭による歴史的アイデンティティの形成と観光化の隘路—
- 黄 樟軒 多国籍企業の現地化戦略—中国コカ・コーラ社CMによる「赤」の演出—
- 松岡 杏珠 VTuber ファン研究—インターネットによるオタク文化の変容—
- 劉周 浩港 政治社会への介入—映画『わたしは、ダニエル・ブレイク』(2016年)によるイギリスの文化政治の可能性と限界—

菊池 信輝ゼミ

- 内山 友太 福祉国家比較から見る日本の特徴
- 近藤 春菜 瑤林瓊樹な人種—南米アメリカ、カリブ、アフリカの縹緲とした歴史—瀟洒な公民権運動
- 関 祐音 静岡県の観光行政とその展望について
- 中村 恵 現代日本における母子家庭の実態と支援
- 新沼 湧陽 学歴獲得の不平等と高等教育の修学支援新制度の課題について
- 服部 輝久 インターネット社会における「民意」の態様
- 藤嶋有美佳 日韓におけるパブリック・ディプロマシーの有効性
- 松本源太郎 地方公立大学としての都留文科大学の存在意義とは
- 宮城 琉斗 日本の労働組合

国際教育学科

青山 郁子ゼミ

- 青木 結那 児童期における認知的感情制御方略と抑うつ、自尊感情の関連—SELプログラムの授業を通して—
- 加藤 汐里 心理的敏感さとの向き合い方—レジリエンスとコーピングが未来志向に与える影響—
- 長沼 遥 教員のPBISに対する受容感と教育現場でのPBISの需要について
- ～教員のバーンアウト、教員のストレス、教員の指導スタイルに着目して～
- 中濱 采音 教員のWell-being向上に向けた取り組みの提案—社会的・身体的・精神的側面から可能性を探る—
- 安田 桃香 親のワーク・ファミリー・コンフリクトが子どものWell-beingに与える影響
- 米野 翼 コーチング後の行動遂行者の心理的特徴分析—MBTI+楽観性尺度+特性的自己効力感尺度を用いて—

木下 慎・相田 まりゼミ

- 柵山有希奈 孤独の可能性
- 私と向き合うことを通じて—
- 正水 彩加 出会いが私たちにもたらしてくれるものとは
- 出会いの偶然性を踏まえて—
- 森田 巴菜 生きがいとはなにか
- ～神谷美恵子とヴィクトール・E・フランクルの思想に着目して～
- 石井 祥子 人はなぜ分類に惹かれるのか
- 鈴木優太郎 消費の不自由性からの脱却はいかにして可能か
- バタイユの聖俗観に着目して—
- 瀬川 源 道徳の理想像とは
- ～ニーチェの超人と伝統的な善悪観の交わりに着目して～
- 竹岡 香帆 他者と共に生きるとは—鷺田清一の思想と哲学対話の実践から—
- 竹寄 凜 「本当のわたし」が意味するもの

佐々木 南実ゼミ

- 川原 鈴乃
豊平実都姫
ネイルが男性に及ぼす感情状態の変化
デンマークの大人の学校フォルケホイ
スコーレで日本人は何を学ぶか
～ライフストーリーによる調査を通して～
- 山野 蒼
デンマークと日本の義務教育の比較
～「競争」の捉え方に注目して～
- 須藤 千歌
特定非営利活動法人と連携した総合的な探
究の時間に関する研究
-教師に与える影響を中心に-
- 馬場 温歌
持続可能な社会づくりにむけてのグローカ
ル教育
-三重県の取り組みを中心に-
- 福島 隆介
中高生におけるリーダーシップ育成について
-UWC ISAK Summer School 2023 の事例を
もとに-
- 山口 紗季
ペアレントクラシーに基づく教育選抜の現状
-現代の小学校受験に注目して-
- 山根 千明
中等教育におけるカリキュラムの中での「国
際化」
-Beelen と Jones の「内なる国際化」に注目
して-

Nordström, Karl Johan ゼミ

- 松平 麻里
不正義・責任・誠実さ
-社会的不正義の解決に向けて自己の責任
を果たすには-
- 小関 夏鈴
学校における日本語サポート実践の課題と
展望
- 篠田 花
アートを手段とした地域活性化の効果と課
題:富士吉田市を事例として
- 土屋 優衣
ポーカーロイドにおける参加型文化:初音ミク
の人气と要因
- 三藤 心瑚
市民主導の再生可能エネルギー導入
-都留市におけるプロセスと課題-

原 和久ゼミ

- 藤澤 杏
日本における国際バカロレア教育とその実践
-カリキュラムの違いに着目して-
- 安藤 聖
なぜ日本人は英語が苦手なのか:
日英文法の品詞に着目して
- 齋藤 美空
公立小学校におけるバイリンガル教育の可
能性
-教師・児童のモチベーションと支援体制に
着目して-
- 島尻百々花
親の関与の在り方について:
大学生の意識調査をもとに
- 高見 順平
遠山 美咲
公立学校における ICT 化の可能性と課題
中学校外国語科(英語)における学習評価に
ついて:
「指導と評価の一体化」に焦点を当てて

茂木 秀昭・藤牧 新ゼミ

- 遠藤 環
日本の大学生の創造性に SNS はどのような
影響を与えるか
- 上杉 沙樹
若者のエシカル消費の意識形成における学
校教育の役割-日本とデンマークの事例か
ら-
- 九貫 七海
学童期における外遊びの与える知的好奇心
への影響
- 高橋 月
大学生を中心とした苦手意識が及ぼす英語
学習への影響と対策
-中高教育プロセスにおけるスピーキング
活動に着目して-
- 小池 悠斗
日本とデンマークのコミュニケーション教育
の比較
~日本人とデンマーク人を対象に行ったア
ンケート調査をもとに~
- 土屋 隆輔
学校教育における教員の多忙化と授業の質
に与える影響の日本と北欧の比較研究
- 長尾景太郎
日本の中等学校における英語教育の改善方
法
- 林 飛希
日本の大学教育におけるオンライン学習と
非認知能力、社会的孤立感の関係

山辺 恵理子ゼミ

- 國分 花音
徳倫理学から考える教師のあるべき姿
- 近藤 晴己
ジェンダーの視点から見たアイドル
- 大平 桃花
「死」について
- 岡山 愛佳
花田 文
推し活とオタクの特徴から考える人間の心理
民主主義に対する認識と教育-日本と北欧
諸国の比較から-
- 宮原 佳歩
言葉の限界と非言語的要素の影響と意義:メ
ラビアン の法則と言語コミュニケーション

学校教育学科

新井 仁ゼミ

ME

- 浜野 拓海 算数・数学教育におけるゲーム理論を活用した教材開発の可能性
- 大西 竜生 マインスイーパーを活用した背理法の学びの一考察
- 加納 郁也 算数・数学教育における ICT を活用した指導に関する研究
- 菊地 太陽 算数・数学科教科書の歴史的考察と学習指導における活用の可能性—授業での教科書の位置付けに焦点を当てて—
- 齊藤 優
堤 優輝 円錐曲線の特徴と教育的価値に関する研究
行動経済学から見た算数・数学教育のあり方に関する研究—ナッジ理論に着目して—
- 吉村 光翔 小学校低学年の算数における図の有効性に関する一考察—文章問題の指導に着目して—

GM

- 赤石 光 数学の問題作成の枠組みと作問プロセスに関する研究
- 井上みのり バレーボールのデータ分析における数理モデルに関する一考察
- 小川 幹太 統計データに基づくリスク管理とポートフォリオ理論に関する研究—競馬の場면을題材として—
- 上倉柚子稀 日常に潜む図形の役割と教材化に関する一考察—図形の機能に着目して—
- 杉下 琴音 日常事象と数学の学びとの往来に関する一考察—数学的モデルの作成を通して—
- 立花 綾都 統計的探究プロセスに基づいた野球データの分析に関する研究
- 中川 智貴 一次関数と連立方程式を関連付けたカリキュラムデザインに関する研究—ストーリーの数学的考察を通して—

市原 学ゼミ

- 吉田 亮太 被体罰経験に対する容認的態度について
- 河村 葵 スマートフォンにおけるインターネット依存と生活習慣の関係について
- 坂本 佳野 大学生活への期待と現実生活のギャップについての調査
- 笹島虎太郎 学業と職業の接続意識が授業態度・学習時間に与える影響
- 福永 哲郎 大学生の親友関係における精神的健康と関係性高揚]

内山 美恵子ゼミ

- 金子 広人 温泉を観光資源とした場合の源泉管理と地域活性化についての研究—山梨県石和温泉を例として—
- 権代 瑞歩 山梨県都留市桂川溪谷内における富士山 星山期 古富士泥流堆積物の岩相変化
- 菅野 星 山形県乱川扇状地における湧水の分布と教材化

- 杉山 真世 地熱発電を例とした「火山の恵み」についての教材研究
- 吉田 好輝 火山になじみのない教員が火山防災教育を指導するうえで理解しやすい指導書の考案

岡野 恵司ゼミ

- 伊藤 海人 図解する平方剰余の相互法則
- 井出隆太郎 必勝!! 統計学に基づいた競馬の勝ち方
- 伊藤 柊輔 スプラウトと Hex の攻略法について
- 加藤 寧々 「三角形の不思議」
- 倉本ひなた 点と線の数学—有向グラフと流れの問題—
- 黒河 文香 「微分を使って卓球台のコナーを攻める」
- 原 百合香 作図問題の不可能性と可能性について
- 眞柄 実由 $u_1(x^*, y^*) \geq u_1(x, y^*) \geq u_2(x^*, y^*) \geq u_2(x^*, y)$
- 丸田 満美 愛の結び目

春日 由香ゼミ

- 佐藤 結依 作品の背景を読むこと —太宰治「フォレストセンス」を中心に—
- 白鳥 晴菜 国語科学習における漫画教材の可能性
- 田部 露亜 心と体を開く国語科音読指導実践の研究
- 出島 光紘 方言教育の可能性 —豊かな言語生活を支える方言—
- 難波 昂示 クリエイティブシンキングを支えるクリティカルシンキングの検討 —表現・エクササイズ活動を通して—
- 廣瀬 稜 国語科授業における ICT 教育の可能性—教室を変える ICT—
- 湊 瑚桃 小学校及び中学校国語科授業における「比べ読み」の検討

加藤 優ゼミ

- 新井ひかり e スポーツが心理的側面に及ぼす影響—自己効力感と情緒に着目して—
- 大勝 聖花 音楽によって得られる心理的な影響—音楽のジャンルと練習時の気分に着目して—
- 加茂 恵 都留文科大学学生の体型認識についての調査—メディアや運動との関係に着目して—
- 今野陽加里 投能力向上をめざした教材の有効性—タオトルシャドーピッチングに着目して—
- 島尾 大雅 スポーツ経験がコミュニケーションスキルにもたらす影響—都留文科大学学生を対象として—
- 白石 隆 都留文科大学男子バスケットボール部の特徴と今後の課題— Four Factors を利用して—
- 土屋 俊貴 大学生の良い姿勢についての理解と現状—都留文科大学学生の住環境との関係—
- 藤本菜々美 小学校体育における ICT 機器の利用について

瓦林 亜希子ゼミ

- 木村 華乃 子どもと教師の「学び」をつなぐ学習評価—
子どもの学習権と教師の専門性から考える—
甲田亞佑人 学習意欲の向上・学習習慣の形成のための家
庭学習の在り方—教師の関わり方から考え
る—
南雲 千知 日常生活に根差した算数の学びの実現—そ
の課題と教師の役割について—
福田 大 子どもの学びとその基盤的教科に関する考
察—総合的な学習の時間の役割について—
柳沼 愛海 差異を認め合い、ともに学びあう学級を目指
して—自由テキストの実践から日本のイン
クルーシブ教育を問い直す—
山田 清加 学校で居場所をもつための子どもの声で溢
れた空間づくり—授業の〈間〉と自己表現
について—

上原 明子ゼミ

- 阿佐 昭博 他教科等と関連させた英語指導
小澤 陸士 小学校英語教育における発音指導
櫻井 丈 韓国における初等英語教育
竹内 来実 World Englishes 時代における日本の英語教
育の在り方
西田 絢音 小学校英語教育におけるフォニックス指導
久松 祥子 小学校英語教育における「やり取り」の指導
山口はる菜 日本における幼児英語教育
渡辺友梨香 小学校英語教育における絵本の活用

菊地 優美ゼミ

- 梅畑 詩音 芥川龍之介「蜜柑」論—回想して語る「私」
の意図—
尾崎 柊斗 芥川龍之介「藪の中」論—空白から読む真砂
像—
齊川 葉奈 母の〈責任〉と困難—李琴峰『生を祝う』論
末広 純平 太宰治「葉桜と魔笛」論—「私」が語る理由
とは—
中田 光弥 太宰治「走れメロス」論—「わけのわからぬ
大きな力」の中にある意味とは—
西澤 唯衣 朝井リョウ「ふたりの背景」論 — 朝井リョ
ウ作品における女子高生像 —
八幡原詠音 小川洋子『いつも彼らはどこかに』論
渡邊 祥大 村田沙耶香『コンビニ人間』論

佐藤 隆ゼミ

- 清都 由馬 現代の生活綴方教育のあり方とは
齊藤 佑季 主権者意識を学校で育てるには
千田 明音 教師の仕事と同調圧力
滝口 紗生 日本の教育費の問題と現状—教育格差から
公教育費を見つめ直す
成田 希唯 日本における小学校英語教育のあり方
原田 芽依 子どもの世界に入る教育実践—渡辺克哉
の実践から現代の教育を捉え直す

清水 雅彦ゼミ

- 岩下 杏奈 教育方法としてのHIPHOPを提案する—
『ヒップホップ・ラップの授業づくり』の実
践に倣って—
熊田今日子 ウォルト・ディズニー・音楽の世界
坂本 弥音 最愛を失った人生の罫—オペラ「リゴレッ
ト」—
竹山りりか 合唱の魅力を活かす音楽教育
長尾 百恵 久石譲が創る音楽の世界観
宗岡 若奈 知的障害教育におけるサイン言語の使用—
どのような歌唱指導を展開するか—

十川 菜穂ゼミ

- 池内 桐子 フランツ・リストの生涯とピアノ作品—巡
礼の年 第2年への補遺：ヴェネツィアとナ
ポリ〉の考察とその第3曲くタランテラ〉
の教材化の可能性—
稲垣 文緒 劇伴と物語の共鳴—TVアニメ「進撃の巨
人」を中心とする考察—
奥山 亜美 スイートプリキュアにおける音楽の扱いと
考察
深松 大 小学校音楽科におけるICTを活用した音楽
づくり—音楽Webアプリケーション『カト
カトーン』を活用して—
宮川 泉実 ミュージカル「レ・ミゼラブル」が人々を魅
了してきた理由
米山 大喜 国際バカロレア教育の手法を活かす—音楽
科教育の質向上に向けた授業改善の探究—

平 和香子ゼミ

- 岡本 万侑 食品ロスに関する大学生の意識と行動との
関連
西條 颯花 推し文化がもたらす大学生に与える影響に
関する研究
生本 莉菜 徳島県における子どもの貧困政策に関する
検討
長屋 美紀 被服実習における縮尺モデルを用いた浴衣
製作の検討
西川 遥 家庭科における金融経済教育に関する研究
馬場 萌歌 生理の貧困に係る山梨県の取組に関する研究
板東 茉那 小学校における安全衛生教育に関する研究
松浦 未結 多様性に対応する制服のあり方に関する研究

竹下 勝雄ゼミ

- 小川 奈央 「自分らしさ・個性の伸長」を育める学びや
環境づくりの充実の重要性
小見佳奈穂 材料体験を通して育まれる児童の創造的な
活動の在り方
垣内 葉月 学校教育、図画工作・美術教育に関する一考察
川上 宜也 多様性を育む図画工作
小林 桃果 図画工作における効果的な抽象画の指導に
ついての一考察
古屋 明花 落語教材を取り入れた図画工作科教育につ
いての一考察
牧野 小春 絵画鑑賞の技術とは何か—鑑賞教育に関す
る考察—
望月 優伽 過疎地域における複式学級に向けた図画工
作指導

筒井 潤子ゼミ

- 青木 智洋 子どもを取り巻く外的要因
清水 風花 「問題を見つける」段階における児童の認知特性を探るー教材の在り方と誤反応を通してー
- 庄司 真愛 不登校児の支援について考えるー学校現場からできることー
- 林 舞子 ヒトの情報取得から表出に至るまで
夫馬 望 労働観と幸福
前田きづな 子どもの心ー実習でのかけがえのない出会いからー
- 山崎 夢奈 信頼関係が自己に与える影響ー心地よい関係性を築いていくためにー
- 山本 彩寧 ルッキズムに囚われない生き方ー大人の私たちはどうするかー

堤 英俊ゼミ

- 大野 歩 学級で孤立する子どもへの教師の働きかけ方ー国語の授業の工夫を通してー
- 小松 愛依 いじめが生じにくい学級づくりー創造的な係活動を通してー
- 樋田 実生 小学校でインクルーシブ体育をつくるーバスケットボールに注目してー
- 西尾 奏海 特別支援学校における不登校の現状と支援方法
- 山中 真鈴 教師は授業中に眠そうな子どもをいかに理解し関わるか
- 山本 詩乃 教師はいつ子どもの声を聴くのかー「ながら作業」の可能性ー
- 依田 留実 小学校における情報モラル教育ーどのように道徳を展開するかー

鳥原 正敏ゼミ

- 秋山 雄大 図画工作を楽しむためにー苦手を楽しいに変えるためのきっかけづくりー
- 猪野 愛梨 内側と外側からみる図画工作の学びに関する一考察
ー日本とオーストラリアの小学校を起点として目指すより良い学修環境ー
- 小河 尚生 図画工作科の指導に関する一考察ー教科書以上の活動を目指してー
- 野口 香奈 鑑賞が生み出す共感について
藤田 駿 図画工作に求められる役割と可能性についてー未来を見据えた視点からー
- 村上 知正 生きる力に関する一考察ー生成 AI は子ども達の創造性にどう影響を及ぼすのかー

中川 佳子ゼミ

- 石川ひばり 大学生における余暇の際の他者との交流が主観的幸福感及び自己肯定感に及ぼす影響について
- 岡本 留奈・菊池 優寧 方言話者に対する好意度の要因と方言のイメージによる印象の違い
- 小建 雄平・本田 悠斗 大学生におけるサウナ利用と主観的健康感、社会的行動との関連
- 島田 歩実 聴覚刺激が味覚と情動に与える影響

- 前田友花子 ボランティア活動参加による大学生の学習効果への影響

西本 勝美ゼミ

- 太田 和宏 里山のくらしと風景を守り続けるためにー民俗文化が育む人間形成力とその継承から探るー
- 小栗 雛 多様性を認め合い豊かに生きるー地域の居場所から探るー
- 加藤歩乃香 教師の願いと葛藤ー不登校の当事者目線からー
- 勘平 知実 子どもの姿に出会う教師ー言葉がけに表れる子ども理解ー
- 新東 一樹 点数による評価を乗り越える学びへー子どもの表現を引き出す共同性をつくるー
- 松本慧次郎 子どものための部活動へー地域移行が引き継ぐべきものー
- 水川 雪音 少子高齢化の進む地域と防災ー平成 30 年 7 月豪雨を題材にー
- 米山 夢実 豊かさを問い直すー農業小学校の取り組みから探るー

平野 耕一ゼミ

- 饗場 蘭 身近な材料を用いて作る 2 足歩行ロボットの教材化
- 大前 圭吾 小学生が分かるオーロラの仕組みを伝える方法について
- 西田 朱里 小学生が宇宙現象に興味をもてる授業づくりに向けて

廣田 健ゼミ

- 鎌原 来夢 戦争非体験者が行う新たな平和教育ー長野県満蒙開拓団に焦点をあてて
- 岡田 誠也 子どもの主体性を育てる授業づくりー「なぜ吉田のうどんが固いのか」という地域教材の開発を通じて
- 五島祐一郎 新自由主義的教育政策からみる教員の業務負担の増大ー説明責任と評価の観点からー
- 柴田めぐみ 子どもの貧困解決における NPO・地域団体の役割ー多様なニーズに対応するためにー
- 舟窪 遼太 いじめが起きにくい教室ー子どもたちをつなぐファシリテーターとして

古屋 和久ゼミ

- 芦澤 稔梨 吉田松陰の教育方法ー松下村塾における教育に着目してー
- 安倍 弘樹 小学校社会科における「劇化活動」の可能性ー「つながり」を育む授業づくりのためにー
- 佐野 茉海 学びを深めるノート指導ー「教科日記」の可能性ー
- 田代 愛純 協働的な学びは学習意欲の向上に有効か
西元 颯 校内カフェを子どもたちの居場所にー校内カフェの役割と課題と可能性
- 山中 海月 協働的な学びを支える教師の働きかけの有効性ー2つの「学び合い」の授業分析を通してー

別宮 有紀子ゼミ

- 今村 拓海 バケツ稲を用いた総合的な学習～生態系の世界の入り口として～
- 磯 容平・福島 麗音 カルシウムがダンゴムシの嗜好性に与える影響
- 河崎 七海・渡辺 翔子 フンは語るー富士山麓野尻草原における大型哺乳動物による種子散布ー
- 榊原李々華 身近な生物や物を使った教材開発～創作楽器を通して音の世界を五感で感じる～
- 藤木 柊成 飛翔昆虫における体構造の種間差～なぜトンボは速く飛べるのか？体構造と筋肉量に着目して～

邊見 信・沼田 あや子ゼミ

- 小長井大樹 学校教育に求められるキャリア教育の在り方
倉上 祐輔 教職人気低迷と向上への手がかりー教員養成課程に在籍する4年生のアンケートを通じてー
- 小泉 佳凜 平等な体験型英語学習機会の実現と自治体の役割～東京都の実践から～
- 西川 弥優 中学校部活動の地域移行が示す新しい考え方～静岡県静岡市・掛川市の実践から～
- 早坂 圭人 日本の学校教育における教科としての美術教育の在り方とその意味＝学習指導要領・雑誌『美術教育』を手掛かりに＝

水口 潔ゼミ

- 伊藤明日佳 熱中症対策のルール設定が与えるプレーヤーへの影響について
- 小倉 志織 スピードスケート500M、第一カーブの滑り方が結果にもたらす影響～レーズ動画を分析して～
- 閑田 千尋 バレーボールのゲーム分析～ブロックとレシーブの関係と競技成績の比較～
- 藏 秋穂 イップスに関する文献研究
- 黒澤 南帆 日本におけるクロスカントリースキーの現状について
- 桑村 京愛 バレーボールのゲーム分析研究～バレーボールにおけるサーブがセンタープレイヤーにもたらす影響～
- 塩谷 莉奈 起立性調節障害についての文献研究
- 田中 桃夏 運動と発声の関係についての文献研究～痙攣性発声障害とろう者に着目して～
- 矢作 青葉 ソフトテニス女子ダブルスにおけるプレースタイルの地域特性について～関東学生連盟所属大学と関西学生連盟所属大学を例に～
- 矢作 若葉 ソフトテニス女子ダブルスにおけるゲーム分析ー左利き後衛に着目してー
- 吉松 七海 食育の変遷ー文献調査研究からー
- 渡邊ひらり バレーボールのゲーム分析ーサーブレシーブとバックアタックの関連性ー

武蔵 由佳ゼミ

- 岩田 葉奈 大学生のInstagramの利用と友人関係についての考察
- 及川 馨 スマートフォンによる子どもの心身への影響についての考察
- 北川ゆきな いじめが自己形成に及ぼす影響
- 木村帆乃夏 習い事での経験がパーソナリティに与える影響
- 下條 彩花 親の養育態度と愛着障害・愛着形成の関連ー子どもをどう理解し、どう支援するかー
- 高草木陽菜 思春期の学級集団における同調圧力についての研究
- 瀧口信一郎 少人数学級が子どもに与える影響
- 刀根 愛斗 教師のリーダーシップ行動の学年による変化に関する考察
- 原 孝輔 挫折経験者に対する支援のあり方についての質的研究
- 原田悠之介 親の養育態度が自己肯定感に及ぼす影響
- 三浦奈々美 子どもの居場所感について～家庭外・学校外の居場所づくりの検討～

山森 美穂ゼミ

- 飯沼 護真 自動車を題材とした小学校高学年から中学生向けのカーボンニュートラル教材
- 市川 祐 ダニエル電池教材の改良～内部抵抗の低減とサイズ可変性の向上～
- 佐藤 智哉 牛乳の成分分離実験と組み合わせたカゼインプラスチックづくり～中学校理科「環境」単元での活用を想定して～
- 中野 晴菜・山岸 彩香 果物・野菜の不可食部を用いた水素発酵
- 守田 知礼 結果と考察を区別して思考・表現できる理科の授業～小学校5年生「物のとけ方」の実験を例にして～
- 山下 輝人 ユニバーサルデザインの視点に基づく小学校3年生「ものの重さ」の授業

地域社会学科

国際経済論 佐藤 惣哉ゼミ

- 山田 哲士 不正会計事件が企業の CSR にどのような変容をもたらしたか—米国と日本の代表的な事件を通して考察できること—
- 伊藤 伸山
井柳 祐哉 e スポーツが今後も発展し続けるには？
アメリカが経済大国で居続ける要因と今後の日本の行方について—アメリカの経済政策を例として—
- 小林 実優 経済発展と環境対策の関係性について—ASEAN 諸国を事例に—
- 田中 健参 MICE によるポストコロナに向けた観光業の展望と課題
- 塚越 順 日本の自動車産業の海外進出についての考察
- 中森 崇介 中国の経済発展・米中貿易対立から見るインド経済の発展について
- 保延 和佳 東南アジア諸国における日系企業の進出について—サービス業に注目して—
- 山谷 豪
李 志峰 自殺が経済に与える影響と対策について
東アジアの地域統合に伴う労働移動—日本の立場から分析する—

地域経済論 清水 和明ゼミ

- 浅井 大介 地域と連携した総合的な学習（探究）の実施に関する研究
- 阿部くるみ 都留文科大学「FIELD NOTE」にみる地域メディアの役割—「記録」と「つながり」に着目して—
- 岩井 愛彩 離島における地域資源を生かした産業の可能性—長崎県福江島のツバキ産業を事例に—
- 加々見桃奈 地方都市における商店街の課題と活性化に向けて—山梨県富士吉田市の商店街を事例に—
- 倉持 優人 中心市街地の観光地化の展開と課題—那覇市国際通りを事例に—
- 齋藤 敦紀 第3セクター—鉄道路線の存続意義と持続可能性に関する研究—青い森鉄道を事例に—
- 佐藤 速人 歴史的建造物・まちなみ保全と利活用の現状と課題—名古屋市有松地区と犬山市犬山城下町地区を事例に—
- 清水 伸紀 郊外住宅地の生活環境の持続可能性に関する研究—山梨県上野原市コモアしおつを事例として—
- 沼尾明日香 分散型ホテルからみる地域の持続可能性について—栃木県那珂川町を事例に—
- 半田 優太 市町村における地域産業連関表作成の意義と課題—岐阜県郡上市を事例に—
- 平野 圭祐 伝統工芸品産地における後継者問題の現状と今後—高岡銅器を事例に—

農山村再生論 福島 万紀ゼミ

- 天野 綾也 高座山における草地利用の重要性と後世への価値の認知向上に向けて—開田高原、阿蘇草原を比較調査地として—
- 吉川 大稀 過疎地域をめぐる議論のこれまでと関係人口論の展望
- 高橋 杏佳 「半農半X」にみる農とXのバランスの多様化と課題
- 竹口 樹音 オルタナティブ・ツーリズムの可能性と課題—「日本大正村」の事例から—
- 中島 瑛斗 移住に伴うコンフリクトをいかに克服するか—南アルプス市芦安地区を事例に—
- 奈良 望 移住支援政策における定住支援の必要性—山梨県上野原市西原地区を事例に—
- 新飯田姫那 旧産炭地域におけるコンパクトシティ化の可能性—北海道美瑛市を事例に—
- 西村 愛里 女性による農業の実践と自己実現の可能性—山梨県内の女性農業者を事例に—
- 平田 桃子 富士宮市の学校給食における地産地消の取り組みの現状と課題
- 村松 健 日本における茶産業の現況分析及び振興策の研究
- 山田 千尋 木材資源の循環的活用の可能性と課題—長野県木曾郡木曾町を事例に—

企業経営論 佐藤 英志ゼミ

- 竹田 卓矢 インディーズアイドル（地下アイドル）とファンの消費行動要因について
- 新 風香 エシカル消費の普及促進に有効な PR 活動—ヨーロッパと日本を比較して—
- 上村 優舞
栗田 優希
坂田廉太郎 日本ワイン産業とワインツーリズムの可能性
SNS を活用した観光 PR の有用性について
鳥獣被害に対する田舎と都市の意識調査—そこから考察する被害拡大阻止に向けた自治体の適切な管理と対策—
- 西野 朱音 アニメ聖地巡礼による地域活性化の可能性について
- 山口友樹乃 ポストコロナにおける E コマース産業の今後の展望—コロナ禍前後の国内の消費活動の変化を比較
- 渡邊 真愛 コワーキングスペースと地方活性化

公共政策論 高橋 洋ゼミ

- 上岡 凜晟 日本における官邸主導の成立要件—小泉・第二次安倍内閣における首相周辺のスタッフを軸に—
- 大村明日美 富士山保全協力金制度の分析—義務化をめぐる議論を中心に—
- 木下 真里 カーボンプライシングに見る日本の気候変動政策の消極性—GX の導入過程に注目して—
- 鈴木 雅稀 東日本大震災以降の復興祈念公園の展開—復興まちづくりの制度的枠組みと合意形成過程からの検証—

戸田 蒼彩	東京電力福島第一原発事故後の原子力政策—革新的エネルギー・環境戦略の政策過程と国民世論—
中西 蓮	官邸主導の農協改革はなぜ妥協に終わったか—郵政民営化の政策過程との比較—
中村 紗弓	第2次安倍政権におけるTPP協定交渉の政策過程—農政トライアングルの関係から—
中山 純	地域の自動車交通に求められる役割とは—地域特性に合わせたコミュニティバス・デマンド交通の維持—
原園 昂輝	「公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法」の制定過程と維持過程の分析・考察—文部科学省の試行錯誤と予算的制約に着目して—
原田 采香	憲政上最長政権は何故崩壊したのか—コロナ対策における安倍一強の官邸主導の歪みの顕れ—
矢嶋 達也	農地での太陽光発電の導入推進に向けた規制改革の考察—営農型太陽光と荒廃農地の活用の視点から—

自治体経営論 鈴木 健大ゼミ

竹内 彩笑	小学校給食での地場産物を活用した食べ残しの減少について
平井しず香	モビリティ・マネジメントによる都留市内バスの利用促進の可能性
河野 友	山梨県笛吹市において旅行消費額を増加させるためには～温泉とワインを組み合わせたガストロノミーツーリズムによる地域一体型観光～
越湖 智	低輸送密度鉄道路線のBRT転換による地方公共交通の維持の可能性について
佐藤 大輔	林業従事者の高齢化における森林管理の手法について～「能代システム」導入による森林境界の明確化の考察～
鈴木明日香	商店街発展の鍵となるコミュニティスペースが果たす役割～静岡県富士市富士本町商店街をフィールドに～
反町絵梨香	MaaS導入による地域交通の維持について
新美 絢子	造り酒屋が取り組む「若者の日本酒離れ」問題—大学生との産学連携プロジェクトを通して—
藤澤 優奈	農福連携の中間支援事業による日本の農業の労働力不足解消の可能性について～香川県社会就労センター協議会による「共同受注農作業」システムの事例を参考に～
松永 桃果	ドローン監視システム導入による世界遺産・天然記念物への不法投棄減少の可能性—青木ヶ原樹海をフィールドに—
宮内 円佳	断水体験を通じた節水意識向上の可能性について～松山市の水不足問題の解消を目指して～
渡辺 熙也	官民連携によるアプリを活用した空き家調査の可能性について

憲法 樋口 雄人ゼミ

竹内 そら	沖縄県の貧困問題を読み解く
伊藤 果琳	社会における「差別」と法制度—性的少数者の事例から—
馬庭 優歩	司法の場において芸術性は考慮され得るか—文学作品における芸術性とプライバシーの衝突を踏まえ考える—
阿部 終平	性表現規制におけるわいせつ性判断基準の変遷と妥当性
金子 千紘	日本における自己決定権—人工妊娠中絶から考える—
毛戸 浩雅	学校教員の働き方改革—負担軽減を目指して—
小林 亮介	有害図書指定制度と表現の自由
佐藤 綾希	日本の国会における二院制の意義と課題
土橋 純鈴	主権者教育の現状と課題—「子ども議会」に期待する政治的有効性感覚
中込 菜野	同性間の婚姻に係る問題の現状と行方—現行の法・政策・社会の動向に着目して—
長谷川結衣	日本におけるインターネット投票の実現可能性—エストニアの事例を参考に—
宮島いづみ	多角的な視点から見る選択的夫婦別氏制度の導入についての検討

国際政治学 峯田 史郎ゼミ

樗木 俊亮	第二次安倍政権による平和安全法制整備
大森 壮真	南シナ海領有権をめぐる中越対立—2014年のオイルリグ事案とその後の両国関係の変化—
栗山 泰成	中国共産党政権下の経済政策における独自性—移行経済諸国との比較を通じて—
斉藤 大成	中国の周縁統治—09年ウイグル騒乱から見る少数民族政策—
田場 啓仁	現代中国戸籍制度と三農問題の関連性—毛沢東・鄧小平政権下を中心に—
村重 湧一	世俗主義とイスラームの相克—トルコにおける宗教教育の意義と可能性—

環境社会学 神長 唯ゼミ

金井 直樹	令和に公害を学ぶ意義—都留市宝鉦山を事例に—
後藤 優奈	蘭嶋島核廃棄物貯蔵問題—マイノリティ差別と環境正義からの再考—
山田 大暉	我が国における食品ロス削減に向けたドギーバッグ普及への課題
賀原 泰地	終わらないカネミ油症—一次世代に影響を与える食品公害—
赤澤 知春	福井県における原発立地地域の住民自治意識
石田あやめ	福島原発事故後の風評被害払拭に向けた農産物プロモーション
小原 李桜	青森・岩手県境産廃不法投棄問題の四半世紀—両県にみる取り組み—
河野 りつ	大規模地震発生時における四日市臨海部の公災害リスク
木下 佳乃	富山イタイイタイ病に見る女性の語られ方—公害発覚後の報道の変遷—
鋤田 紗良	イタイイタイ病資料館における次世代教育の展開

高波 翔琉	足尾鉍毒事件の継承手段としてのダークツーリズム
鶴窪 廉	九州北部豪雨における災害廃棄物処理—大分県日田市を事例に—
西村 利智	高校における公害教育実践—1960年代の沼津市から—
花城 康成	米軍基地と沈黙する若者—特異な社会構造がもたらす沖縄の課題—
室崎 創平	防災開発事業をめぐるジレンマ—減災と環境保護の葛藤—

環境法 石巻 実穂ゼミ

天野 夏妃	廃棄物発生抑制の現状と普及について
遠藤 尚志	日本とクジラの今後—捕鯨文化と海洋汚染—
QIU XIAOTIAN	海洋プラスチックごみ汚染に関する生物多様性保全のための法制度と取り組み
久保田 祐	これからのダムの運用と河川の持続的な利用について
熊谷 優成	高レベル放射性廃棄物問題について
熊坂 直樹	自然公園制度の保護と利用のあり方
河野 稜大	自然災害と日本の対応—被害の最小化を目指すための考察—
笹之池達也	日本の農業における地球温暖化適応策
白鳥 彩季	資源循環に関する取り組みと法制度—循環型社会の形成のために—
本多 公平	観光資源と地方での再生可能エネルギー—長崎県の島原半島の観光資源と再生可能エネルギーを例に—

地域社会論 田中 里美ゼミ

望月 凜香	中高生の居場所づくりに関する—考察
秋元 岳斗	プロサッカーチームの誕生は地域になにをもたらすか—いわきFCの事例—
植本 裕貴	「父親の育児意識と子育て参加」—育児コミュニティから考える—
卯月 亜依	性に関わるアンコンシャス・バイアスについての—考察
北崎 大翔	地域鉄道の存続は必要か—JR 可部線の復活事例から考える—
小澤 もえ	アイドルオタクの地方遠征—地域に与える経済効果—
兒玉 大聖	自治体の SNS 利用に関する考察
小林恵美利	買い物弱者への支援に関する—考察—山梨県都留市を事例に—
藤井 鳴海	夜間中学に関する—考察
山本瑛里奈	地域博物館の市民参加型活動と地域活性化
若原 直輝	学内コンビニエンスストアがもたらしたものの—ローソン S 都留文科大学店を事例に—
渡邊 綾音	「こども食堂」の意義と更なる発展の可能性について

都市環境設計論 前田 昭彦ゼミ

池田 直生	「コミュニティバス」に関する文献的研究
村松 智也	日本における無電柱化低コスト手法の現状と今後について
浅川晃太郎	民間による空き家管理サービスの提供が果たす役割とその課題について
河田 容延	日本における道路交通とラウンドアバウトの現状と今後について—法令と政策への提言—
小関 愛里	新潟県上越市における古民家の商業利用の現状とまちづくりへの影響
佐沢 葉	化学物質過敏症について
鈴木 開登	神宮外苑再開発について
関 裕心	日本における難民問題の実情と、今後の対策
中村 太洋	Jリーグクラブが地域社会にもたらす影響とその価値
橋本 隆良	戦時下に清須市に整備された甚目寺飛行場についての研究
藤井 美奏	官民連携により整備された公園の公共性に関する研究—渋谷区立宮下公園を事例に—

社会科教育 西尾 理ゼミ

SU YUYANG	歴史教育による国際関係の理解について
金子 飛鳥	中等歴史授業における歴史的思考力育成の研究
斉藤ういる	歴史教育における ICT 教育の効用と限界を考える—世界史の授業実践から分析—
橘 幸誠	中学歴史教育の存在意義とより良い教育方法
中込 聖人	高等学校日本史教育におけるアクティブ・ラーニングと討論授業について
松原 向陽	アクティブラーニング型授業におけるブレインストーミングの有用性に関する研究—マインドマップを活用した日本史学習の可能性—
三浦啓史郎	「地理総合」における ICT を活用した防災教育の授業開発—東日本大震災の震災遺構を教材として—
吉田 晶	倫理教科書の中の宗教思想の分析と授業実践案について—高等学校教育の倫理科目における宗教思想を学ぶ意義について—
後藤 沙環	地理教育の復興とその役割—アメリカの地理教育復興運動の事例より—

環境教育 秦 範子ゼミ

- 佐々木咲希 津波被災地における農地復興と地域づくり—仙台市若林区荒浜地区を事例に—
- 浜名 康生 山梨県における地域コミュニティの在り方—無尽・貯金会を事例として—
- 安樂 陽向 eスポーツ文化の発展と教育・福祉における可能性
- 萩原 大晴 ブドウ農家の気候変動適応策—山梨県峡東地域を事例に—
- 小澤 陸人 学校教育における食品ロス削減を目的とした食育の可能性と課題—都留市の学校給食に着目して—
- 栗原 巧 学校教育における清掃が環境美化意識に及ぼす影響
- 佐野 大地 児童公園の在り方に関する一考察—羽根木プレーパークにおける「遊び」に着目して—
- 白石 心太 行政と市民団体による里地里山保全の可能性と課題—青梅の森を事例に—
- 土田亀利丸 水害に対する防災意識を高める教育の可能性と課題—川崎市の防災教育を事例に—
- 土屋 春乃 都市型環境学習施設のごみ減量への啓発活動と環境教育—東京都江東区・板橋区を事例に—
- 西田 望 オリンピック・パラリンピックにおける環境問題—2020 東京大会を事例に—
- 原山 翔多 小水力発電による地域活性化の可能性—山梨県都留市家中川小水力発電所「元気くん」を事例に—
- 村岸 良祐 青年のボランティア活動への参加意識—野外教育ボランティアに参加する学生を対象に—

生涯学習論 富永 貴公ゼミ

- 荒井 隆臣 ICT 型不登校支援は「居場所」になれるのか
- 石澤 志帆 地域ねぶたに参加することが持つ現代的意義—青森市内の運行団体を事例に—
- 遠藤 理沙 大人の発達障害への支援策の意義と課題
- 河野 希 図書館は学習時間の向上に資するか
- 岸井 尊 ゲートキーパーはなぜ認知度が低いのか—都道府県及び市区町村のゲートキーパー養成の取り組みを事例に—
- 坂本 真一 現代社会における〈性的自己決定権〉の再考
- 鈴木 優奈 企業における合理的配慮の展開—もにす認定事業に着目して—
- 寺嶋 乙和 健全育成とは何か—児童福祉法成立過程を手がかりに—
- 松本史美也 超高齢化社会における大学での学び直しを通じた交友関係の拡大—T 大学に通うシニア学生への聞き取り調査をもとに—
- 三瓶 健太 カントはニヒリズムを予感していたか—第一・第二批判を中心として—
- 水間 果歩 女性活躍推進法下の企業行動におけるワークライフバランスの位置づけ—長時間労働との関連から—
- 望月恵利名 里親支援に必要なことはなにか

地域史 鈴木 哲雄ゼミ

- 青木 大地 文政改革前後における関東の村の自治—浪人者取締組合と小組合議定を中心として—
- 坂本 和弥 阿波大杉大明神と天狗信仰
- 佐藤 雅 江戸時代における庶民女性の地位—満徳寺と三くだり半—
- 志村 奏恵 鎌倉街道上道と熊野修験
- 諏訪圭太郎 鎌倉幕府の鷹狩禁止令に関する一考察
- 高橋 彩夏 禅宗と女性—鎌倉幕府との関係性—
- 中川 大輝 近世青梅新町村の水利と玉川上水
- 番場 優太 郡内小山田氏—小山田信茂の領内経営—
- 古江南美子 たのかんさあに見る薩摩の農耕信仰
- 森下由寿稀 三遠式銅鐸と東海勢力—都田川流域における銅鐸の廃絶・埋納から—
- 山下 光哉 享保改革期における紅葉山文庫の役割—書物の出納・管理の視点から—

文学専攻科教育学専攻

指導教員 佐藤 隆

鱈坂 裕之 教師と子どものつながりをつくる—孤立化する教師と子ども—

大学院文学研究科

○国文学専攻

指導教員 古川 裕佳

津金 伽帆 村上春樹が描く学校と教師—「鏡」と『スポーツニクの恋人』を中心に—

指導教員 吉田 恵理

華 朱亮 トリックに隠された動機—江戸川乱歩「陰獣」と「屋根裏の散歩者」を中心に

○社会学地域社会研究専攻

指導教員 西尾 理

佐藤香奈子 学校教育における「素材の教材化」の意義と課題—「教材」に関する研究および社会科教育における教材化事例を参考に—

○英語英米文学専攻

指導教員 儀部 直樹

佐藤みのり On Fear in H.P. Lovecraft's Works

指導教員 中地 幸

井上 明紀 Aspiring for Non-normative Life : Queer and other Marginalized Characters in Yiyun Li's Works

荒木 佳恵 Identity Fluctuation and Formation in *The Reluctant Fundamentalist*

指導教員 三浦 幸子

高橋 寧夫 Researching Collaborative Writing in English Education

戸沼 瑛弥 Developing Intercultural Communicative Competence through English Drama -*Hamlet*-

指導教員 鷲 直仁

畠田 佳奈 Understanding Light and Shade in Edward Burne-Jones : A Study of *The Flower Book*

細川 佳恵 Dismantling Dystopia through *The Handmaid's Tale* and *The Testaments*

○比較文化専攻

指導教員 伊香 俊哉

片田 貴士 「唐手」から「空手」そして「空手道」への変遷の歴史的検討—「空手道」の「礼」をめぐる前提的考察—

指導教員 山本 芳美

佐々木二葉 近代日本映画における検閲—女性の喫煙表象をめぐる—

○臨床教育実践学専攻

指導教員 市原 学

南 拓海 家庭学習における教訓帰納が自己調整学習に及ぼす影響

指導教員 瓦林 亜希子

三原 悠 主体性を認め合う教師の同僚関係の構築—泉優太の実践記録とその同僚への聞き取りを手掛かりに—

指導教員 佐藤 隆

高橋梨衣奈 子どもの自己の育ちを支える教師像を探る—太田一徹の教育実践を手がかりに—

指導教員 西本 勝美

高木 舜斗 高校の学びを再構築する—地域とつながり自己を育む—

田中 莉彩 他者へと開かれる自由を求めて—文化としての「ヒト」を理解する—

指導教員 廣田 健

瀧澤 杏樹 地域教育文化運動が示唆する地域の教育力再考—つる子どもまつり運動を事例として—

平野 秀典 新自由主義教育改革による同僚性の破壊とオルタナティブの構築

～過労自殺分析と職場経験の聞き取りを通じて～

牧野 諒太 "自己責任論" 脱却に向けた教育的アプローチ —キャリア教育の再検討と「地域と教育」論への注目

国語国文学会主催 秋季講演会

古事記・日本書紀神話の受容と変容を考える

開催 11月11日(土)

講演者 及川智早氏



秋季講演会印象記

今回、帝塚山学院大学教授の及川智早先生による、「古事記・日本書紀神話の受容と変容を考える」と題してのご講演を拝聴する機会を得た。資料として図像が多く用いられ、親しみやすく楽しめる構成の講演で、とても面白く拝聴できた。

講演では、神話の受容と変容の具体的な事例として、ヤマタノヲロチ退治神話を中心に解説いただいた。引札、絵はがき、書物の挿絵に描かれた図像の多くは、記紀の記述と異なる点を多く含み、例えば、図像中のヲロチはどうみても「龍」の様相で、「蛇」とされる記紀の記述とは異なっている。このような表現は、古風土記や中世期の物語の記述をふまえたものらしく、蛇が中国の龍と同種として扱われることも多かったとのこと。また近代以降の図像ではスサノヲとヲロチが対峙する脇に、本来楯に変化しているはずのクシナダヒメが描かれたものも多く見られる。私は、近代の描き手が記紀の記述をきちんと確認しなかったことによる誤りかと当初考えたのだが、しかし先生のお話では、生贄や囀としての女性を描くことによって華やかな図像や緊張感を演出するという効果が期待された可能性があるとのこと。表現の背後にある必然性を知ること、受容史研究の面白さを感じられたように思う。

現代でもゲームなどのポップカルチャーにおいて、多く神話モチーフのキャラクターが登場している。そういった媒体での描かれ方についても、本講演をふまえて、問題意識をもって確認してみたいと思われた。

(国文学科3年 榎本 彩乃)

秋季講演会を終えて

本講演をとりわけユニークなものとしているのが、及川氏蒐集の図像資料であることは疑いない。大衆文化はその時代に生産され消えていくのが常であるが、氏の長年にわたる着実な蒐集活動は、それらに記・紀受容史上の資料としての新たな意味を与えた。そしてその意味づけには、氏が古代の神話伝承を長らく研究する中で得られた、人と神話との関係性についての知見が生かされていることもまた確かである。

人文科学の研究対象・方法は多様である。同時にその研究は、確かな専門知によって支えられるべきものでもある。その思いを強くした講演であった。

(国文学科准教授 小村 宏史)

講師紹介

及川智早(おいかわ・ちはや)

1959年、岩手県生まれ。早稲田大学文学部助手、早稲田大学高等学院教諭を経て、現在、帝塚山学院大学教授。古事記学会理事、上代文学会理事、大正イマジユリイ学会常任委員を務める。専門は日本神話、日本古典文学、古代説話、およびその受容史。著書に『日本神話はいかに描かれてきたか(新潮選書)』(第6回古代歴史文化賞優秀作品賞受賞)、『変貌する古事記・日本書紀(ちくま新書)』がある。



英文学会主催 翻訳ワークショップ

翻訳は過去への旅

～「プーシキン並木通り」“Puschkinallee”を読む～

開催

11月6日(月)

講演者

多和田葉子氏
満谷マーガレット氏



2023年11月6日(月)に『かかとを失くして』や『犬婿入り』で知られる小説家の多和田葉子先生と翻訳者の満谷マーガレット先生をお招きして『プーシキン並木通り』についての翻訳ワークショップを開催した。

本ワークショップでは、より作品の理解を深めるため、舞台となったベルリンのトレップタウアー公園の映像を見た後、ワークショップに移った。講師紹介の際には多和田先生より歴史的背景や、意図、翻訳する際の思いなどについてお話いただいた。

「英訳を考える」のセクションでは、5人の学生が「プーシキン並木通り」から好きな箇所を選び、自分なりの翻訳を考え、考察とともに発表を行った。英文学科1年の渡邊さんは「不安感がより伝わる翻訳を目指した」という。彼女に対して多和田先生は「一番伝わって欲しかった部分がしっかり伝わる英文になっていると思う」と仰った。

2人目の稲葉さんは作中に登場する「あの人」という表現に興味を持ち、満谷先生や多和田先生と意見を交わした。この作品に於いて「あの人」は性別が決められておらず性別がわかる表現は出てこないため、満谷先生もこの表現は英訳に悩んだ部分であると仰っていた。稲葉さんの訳での「あの人」の表現に対して満谷先生はジェンダーにこだわったことを評価した。現代の小説ではジェンダーを定めないものにおいて she や he の代わ

りに they が使われるという話題も出た。

3人目の発表者の2年生 河合さんは、作品に登場する兵隊の表情について触れながら英訳をした。多和田先生は「兵隊というのはいつも不機嫌な顔をしているものという偏見があった」ということを仰った。

4人目の発表者の2年生 飯倉さんは日本語版での靴、洋服の順番になっているが英語版では洋服、靴の順になっていることに疑問を持ったとのことだった。多和田先生は、日本語版が一般に人がこれらを脱ぐ順番になっていることを説明した。

最後に発表した2年生の深澤さんは、作品に出てくる渋谷の若者について触れ、若者言葉を訳すことに興味を持ち翻訳箇所を選んだが英訳にとっても苦戦したという。満谷先生は深澤さんの訳の「nooooo way (うつつそでしょ!）」について感心したと述べた。多和田先生は、今渋谷の若者に戦争に行ってくださいというようなことを言ったとして、戦争について何も考えていない若者が何を思うかというフィクションだと解説された。

質疑応答では多くの学生から、作中の表現や翻訳者と編集者の関係性について質問があった。参加者全員が物語の世界観に惹き込まれ、作品の理解を深めるとても有意義な時間となった。

(英文学科1年 小野田 聡美)

講師紹介

多和田葉子(たわだようこ)

東京都生まれ。本学英文学科特任教授。早稲田大学第一文学部を卒業し、ドイツに渡る。チューリヒ大学博士課程修了。大学を卒業後、およそ40年にわたってドイツで暮らしている多和田先生は、日本語とドイツ語の2つの言語で小説の執筆を行っており、作品は10を超える言語に翻訳されている。作品は国際的にも高く評価され、7年前にはドイツで最も権威のある文学賞のひとつ「クライスト賞」を受賞、そして5年前には『献灯使』がアメリカで最も有名な文学賞「全米図書賞」の翻訳文学部門に選ばれている。



満谷マーガレット (みつたにマーガレット)

アメリカ・ペンシルヴァニア州出身。日本文学研究者、翻訳家。ウースター大学卒。東京大学大学院博士課程修了。多和田葉子氏や大江健三郎氏の作品の翻訳を多数手がける。『献灯使』の翻訳 *The Emissary* が2018年アメリカで最も権威のある文学賞である全米図書賞(翻訳書部門)を受賞した。



国際教育学科主催 特別講演会

PYP における共感教育とは？

—岡村拳先生の特別講演会レポート

開催

10月16日(月)

講演者

岡村 拳氏



2023年10月16日、月曜日の5限に、国際教育学科主催の特別講演会が、大学の#5101教室で開催されました。国際バカロレア（IB）の初等教育プログラムである Primary Years Program(PYP)に焦点を当て、開智望小学校（IB World School）のIBPYPプログラム教諭であり、IBコーディネーターでもある岡村拳先生をお招きしました。

「PYPにおける共感教育とは？」というテーマが設定され、まず、岡村先生自身の研究テーマでもある「差異を顕在化する教育実践」と題した講演が行われました。具体的な実践例を交えながら、多様性を尊重し、差異を理解することの重要性についてお話しくださしました。

後半は集まった50名近くの学生たちとのグループディスカッションでした。岡村先生の提示したテーマに基づき、学生たちは熱心に意見を交換し、それぞれの考えをJam Boardに書き込み、共有しました。

最後に、岡村先生の勤務先である開智望小学校についてご紹介いただきました。開智望小学校・中学校は2022年に国際バカロレア機構から認定を受けたIB World Schoolであり、茨城県では初の認定校です。国際教育学科の卒業生も教員として勤務しています。岡村先生のお話からは、学年や教科の枠を超えた多彩な学びが行われている様子が伝わりました。特に印象的だったのは、男子児童の喧嘩に対して、ある女子児童が「それは二人のパースペクティブが違っているだけでしょ」と言ったというエピソードです。多様な

視点を重んじるIB教育のフィロソフィーが生き生きとした実践として実を結んでいる様子に、学生たちも興味津々聞き入っていました。

今後も国際教育学科では、多様な教育に関する講演やイベントを企画していく予定です。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

(国際教育学科講師 佐々木 南実)



学生たちによる JAM board

講師紹介

岡村 拳 (おかむら ちから)

筑波大学大学院教育研究科教育学(国際教育)修士プログラム卒業
国際バカロレア教授免許 IB Certificate in teaching and learning、IB Advanced Certificate in teaching and learning and research 取得
開智望小学校 (IB World School, PYP) 教諭、IBコーディネーター
担当教科: 英語、英語探究



ジェンダー研究プログラム運営委員会主催の講演会

中国女性の装いと身体

纏足からチャイナドレスへ

開催

11月15日(水)

講演者

謝 黎氏



2023年11月15日、ジェンダー研究プログラム運営委員会主催の講演会「中国女性の装いと身体 纏足からチャイナドレスへ」が行われた。講師の謝黎先生は、日本人にとってなじみがない中国の美の基準や、衣服で身分を示す文化であることから、纏足の風習の広がりとその長らく維持された理由について説明していった。

謝先生によると、神秘性がある纏足には、男女問わず魅力や誇りを感じていたという。精神的、肉体的に辛くあるものの、纏足の有無が結婚の判断基準になるほか、纏足ではない女性が戦争で殺されることもあった。民族的指標や社会的価値からも、纏足には重要な意味があった。20世紀初頭から普及したレントゲン撮影写真によって、その苦痛が可視化されると中国国内の纏足の価値が崩れていき、纏足を解く「放足」が強制されるようになったそうである。

また、チャイナドレスの原型となった旗袍は、時代が下るにつれて身体のラインに沿うようになっていった。男性の服装を女性も用いることで男女平等の主張を含むようになるなど、装いに多様な意味が込められていたことがわかった。纏足、チャイナドレスは、歴史背景と深く関係しており、その歴史を内や外から、そしてジェンダー的視点から俯瞰することができたことが今回の講演会で得た学びであった。歴史から女性たちの強く生き抜こうとする姿勢を感じられた。

最後に、「人間はありのままの身体では満足しない」との言葉には、さまざまな身体変工を行う現代を生き

る私たちにも当てはまる。散髪、洗髪、化粧や付け爪、脱毛などは何のために行うのか、女性にとって理想の女性像や美の基準とは一律なのだろうか、考えさせられる講演であった。

(比較文化学科2年 須田 晏奈)



講師紹介

謝黎(しゃ れい)

謝黎先生は、2021年より比較文化学科の非常勤講師をつとめるほか、ジェンダー研究プログラムの「ジェンダー研究ⅠA」「ジェンダー研究ⅠB」を担当している。チャイナドレスほかの服飾コレクターとしても知られ、これまでに神戸ファッション美術館、長崎歴史文化博物館ほかでコレクション展示がされている。主要著書は『チャイナドレスの文化史』『チャイナドレスをまとう女性たち：旗袍にみる中国の近・現代』『チャイナドレス大全：文化・歴史・思想』(すべて青弓社)。



卒業制作展を終えて

卒業制作に取り組む中で「制作とはなにか、何のためになるのだろうか」と、悩む場面もありました。しかし、制作を続ける中で好きなもの、つくりたいものを無我夢中になってつくることが自体が楽しく、幸せなことであり、具体的な意味はなくても価値のあることではないか、と考えるようになりました。

卒業制作展の準備では、作品を通して私が制作中に感じた楽しさや、幸せな気持ちが誰かに届いたらいいな、と考えつつ仲間と作業を進めました。そして、会場に来ていただいた方々と交流する中で、それを伝えることができたのではないかと感じました。

このように、夢中になって探究することは、新しい価値を生み出すことに繋がり、更に探究の輪は自己完結的なものではなく、いつか誰かに広がっていくと考えるようになりました。

卒業制作展を終えるとともに、大学生活を振り返りながら、追求できることをみつけられたことや、学びを深められたことこそが、掛け替えのない私の宝物であることに気が付きました。

文末ではありますが、卒業制作展をご高覧頂きました皆様と、これにご協力いただいた多くの方、図工・美術教室の仲間へ、感謝の気持ちを伝えたいと思います。皆さん、本当にありがとうございました。

(学校教育学科 図工・美術系 立体ゼミ 野口香奈)



私の卒業制作

音楽系 卒業演奏会

令和6年1月27日に開催された音楽専攻主催の卒業演奏会は、今年からコロナ禍前の形式で行うことができました。コロナ禍の音楽の苦悩や辛さを経験してきた私達だからこそ、今まで以上に熱を入れて取り組むことができました。これまで先輩方の素晴らしい演奏を聴き、自分たちもあのステージで先輩方のように輝けるのか不安も多々ありましたが、4年間ご指導くださった先生方や音楽系の先輩、後輩の皆さん、関わっていただいた全ての皆様のおかげで素晴らしいステージをつくることができました。関係者の皆様に改めて深く感謝申し上げます。そして今年の4年生合唱では、自分たちで作詞作曲をした「僕たちの絆」を初演させていただきました。これまで

の大学生活や卒業に向けた様子が歌詞や音になっており、私自身本番は感動で涙を流してしまいました。

これまで音楽系として学んだことは、音楽の技術だけでなく、1人では音楽をつくり上げられないということでした。練習が苦しい

時、何度も支えてくれた仲間の大切さや温かさを感じられる機会をいただけました。大学4年間の学びを、これからの新たな人生に活かしていけるよう、日々精進したいと思います。

(学校教育学科 音楽系 奥山亜美)



4年生と審査して下さった先生方

ハーバード大学世界文学セミナーに参加して



大学院文学研究科
英語英米文学専攻
井上 明紀

2023年7月の4週間、IWL (The Institute for World Literature) 主催の世界文学セミナーに参加した。このプログラムは毎年開催地が変わるが、今年はIWLの本部であるハーバード大学が会場となった。世界文学の研究者が教授陣として集まる上、ゲスト講演者も豪華である。参加者もこの分野に強い興味を持つ研究者と学生で、刺激の多いヶ月をアメリカで過ごすことができた。このような貴重な機会を与えてくださった都留文科大学にまず感謝申し上げる。

セミナーには事前に指定された文献を読んでから参加する。樋口一葉やジュンパ・ラヒリなどの小説や、張愛玲の映画、あるいはジュディス・バトラー、ジャック・デリダ、ベネディクト・アンダーソンといった理論家の文献など、さまざまな小説や論文を読む機会となった。これらの文献を元にディスカッションが進んでいくため、刺激的な時間だった。プログラムにはコロキウムという学生による研究会の時間も設けられている。私は社会学



閉会式中、ダムロッシュ先生からの証書授与
(筆者の一眼レフで友人撮影)



クルージングディナーにて
(本人右から3人目)

と世界文学をテーマにしたグループに属して、修士論文で取り組んでいる作家 Yiyun Li の短編について発表した。近い分野の研究者の集まりなので、クィア理論やフェミニズムの専門的な観点からフィードバックをもらうことができ、非常にありがたかった。参加者はハーバード大学の図書館を利用できるため、研究に関係する貴重な資料にたくさん当たることができたことも大きな収穫である。ホミ・バーバやギッシュ・ジェンなど、著名な講演者のお話を聞く機会にも恵まれた。

一日の日程が終わるとプログラムでできた友人たちと散歩したり、美術館を訪れたり、お茶をしたり、ご飯を食べたりと、ボストンの夏を楽しむことができた。平たい桃やさくらんぼ、ブリトーやジェラートや様々な種類の中華料理など、美味しい食べ物を楽しめたことも幸せだった。今思い返しても、誌面に書き切ることができないほど充実した日々を過ごすことができた。現地でも体調などを気にかけて下さった加藤めぐみ先生と、応募の段階からサポートして下さった指導教員の中地幸先生には特段の感謝を申し上げます。

国際交流センター

「第20回やまなし留学生スピーチコンテスト」に出場

2023年12月9日、山梨県立図書館において第20回やまなし留学生スピーチコンテストが開催されました。このコンテストでは、山梨県内の大学・短期大学に在籍する留学生が日本で学ぶ理由や目標などを発表します。日頃の学習成果を日本語で発揮する機会でもあります。今年のスピーチテーマは「私がここで頑張る理由」。それぞれの留学生がなぜ日本に来て一生懸命日本語を学ぶのか、「山梨県」で頑張る理由を熱く語りました。家族への想い、幼いころからの日本文学や文化への憧れ、実践的な経験としての留学、自然豊かな山梨で学ぶということ、など、留学生の頑張る理由も様々です。本学からは5名の留学生が出場し、

2名の留学生が第1位とサドヤ賞を受賞しました。参加されたすべてのみなさんのますますの頑張りと成長、夢の実現を応援します。



2023年度後期交換・指定校留学生修了式を開催

2024年1月29日、2023年度後期の交換・指定校留学生修了式が行われました。今回はTISP



(Tsuru International Student Program) の1名(イギリス オックスフォード・ブルックス大学)と、アジア圏の留学生8名(中国 湖南師範大学1名、上海外国語大学3名、韓国外国語大学校4名)の計9名が出席し、加藤学長より修了証書が授与されました。留学生一人ひとりからの感謝の言葉や都留での思い出話に続き、加藤学長からは「都留での留学生生活は今後の人生に大きな影響を与えることになるでしょう。ぜひ帰国後もこの経験を活かして活躍し、機会があればまた都留にいらしてください」とのお言葉をいただきました。

3大学と新規交換留学協定を締結

都留文科大学は、スウェーデン・ダーラナ大学、イタリア・ナポリ東洋大学、中国・北京理工大学と、学術交流や学生交流の連携を進めることを目的とし交流協定を締結しました。

今後、交換留学生や学生を相互に受け入れる教育プログラム、共同研究等を行う教員の相互派遣、研究・教育情報の交換などを通じ、世界各国の協定校との交流が一層深まることが期待されます。



地域交流研究センター活動報告

文大ボランティアひろば

「文大ボランティアひろば」は、都留文科大学と都留市社会福祉協議会が連携し、月に1回お昼休みに開催しています。ボランティア活動推進のため、地域のボランティアニーズの紹介やボランティア登録の案内を行い、参加した学生同士の交流の場にもなっています。今年度は、地域のボランティア団体の方をゲストとして呼びし、実際のボランティア体験談や、ボランティアを始めたきっかけ、ボランティアの魅力、継続の秘訣などをお聞きしたり、学外へ出て大学周辺地域のごみ拾いを行う清掃活動などを実施しました。



10/12 (木)
都留市読み聞かせボランティア こぶたの会

NEW

東京の病弱教育の主人公たち作品展

10月24日(火)～11月5日(日) THMC 2階エントランスホールにおいて、「東京の病弱教育の主人公たち作品展」を開催しました。作品は、東京の病弱教育を経験した子どもたち約40人の絵や作文、詩、メッセージなどをポスター印刷してパネルにしたものや、習字の実物も展示しました。

学校教育学科 佐藤比呂二先生が常駐し、来場者へ作品の説明や設置してあるモニターから

画像や音楽を流し子どもたちの思いを伝えておられました。来場者の中には、展示作品の子どもが家族が県外からお見えになり、佐藤先生と闘病中の思いなどをお話されていました。2日～4日は桂川祭も同時開催され、桂川祭に来られた市民にもご覧いただき、このような作品について多くの方に知っていただく場となりました。

NEW

市民公開講座

光の不思議

—小さなものや遠くのを拡大して見てみよう—

1/21(日) 学校教育学科 三崎隆特任教授による、市民公開講座「光の不思議」を開催しました。ペットボトルとガラスビーズを使った顕微鏡を作り、玉ねぎの皮などの植物の細胞を観察したり、工作キットでガリレオ式の望遠鏡を作り、望遠鏡の仕組みについて学びました。対象者を中学生とした講座については新規の開催となり、講座を通して本学を身近に感じてもらい、将来の進路選択に繋がるような目的で開催しました。





11/9 (木)
楽山地区のごみ拾い清掃活動



1/18 (木)
NPO 法人 にこ研
親子のえがお研究クラブ



12/14 (木) あすなろ学習会



【参加者からの感想】

- ・光の性質を理解し、望遠鏡や顕微鏡の仕組みが分かって面白かった。
- ・理科の光は苦手であり好きではなかったが、楽しく手を動かしながら行うことで少し理解できた。
- ・身近にある都留文科大学で、貴重な体験ができたことにより今後の将来に役に立つのかなと感じた。

都留文科大学附属小学校教育課程特例校（英語特区事業）

ミニミニ大学開催

11月6日（月）、都留文科大学附属小学校の児童26名が都留文科大学を訪れ、佐藤明浩副学長による大学の説明、アーロン先生の特別講義を受け、附属図書館見学と、大学授業を体験しました。

アーロン先生による特別講義は、児童が自分の名前を名札にローマ字で記入することから始め、英語での挨拶、知っている英語の単語を答えてそれを学生がホワイトボードに英語で記入、どちらが好きかなど画面に映された英語や絵などを見ながら、また、

隣の席の児童と対話をしながら実践的に英語を学びました。

附属図書館では、低学年は国際教育学科三藤心瑚さんによる英語本の読み聞かせ、高学年は司書から英語の本についての案内が行われました。

5201教室で行われた国際教育学科 佐々木南実先生の授業では、学生が8つの班に分かれ、児童は2名～1名ずつ加わり学生と一緒にアクティブラーニング形式の授業に参加し、発表も行いました。



授業体験 Day 開催報告

令和5年11月20日、山梨県民の日に授業体験Dayを実施いたしました。当日は大学の通常授業日だったため、大学で実際に行われている授業に高校生が参加することで、将来の選択肢を広げてもらう良い機会になるのではないかと考え、大学の一部の授業を高校生も参加できるようにいたしました。全学科による協力のもと12クラスを本学受け入れ科目として開講したところ、24名の申し込みがありました。

高等学校では探求型の授業が始まり、専門的な知識に触れる機会が求められております。また、中学校・高等学校におけるキャリア教育の重要性が広く周知

される中で、参加して下さった高校生が自らの将来をより具体的に考えてもらうきっかけになったのであれば、我々としても大変うれしく思います。

事後アンケートでは、「実際に授業が行われている日だったので雰囲気良く分かった」。「(高校と違って90分授業だったが)時間が早く感じた」。「飽きなかった」というように好意的な意見を多数頂きました。

授業開講にご尽力頂きました教職員・本学学生には深く感謝申し上げます。誠にありがとうございました。



キャリア支援センター

就活支援イベント開催 全国から多くの企業が参加

教員養成大学でスタートした本学ですが、今は半数以上の学生が一般企業に就職しています。就職先も全国津々浦々、業界も多岐にわたります。採用や選考の過程でひとたび縁が生まれた企業からは、多くの人が想像する以上に、企業人材として高い評価を得ています。ただ過去には、どうしても知名度が低く、「つる」と読んでもらえず「とどめ?」「とる?」などと言われがっかりしたというケースもありました。

今年も縁ある企業の方々を招く就活イベントが、3年生の就活が本格化する3月を前に開催されました。2月5日の大手化粧品メーカーによる「身だしなみ・メイクセミナー」を皮切りに、2月6日には山梨・静岡の企業18団体を招いた合同セミナー、7日～9日は卒業生が活躍する全国区の企業27社参加の合同セミナー、14日と15日には全国各地からUターンを支援する県や支援団体を招くイベントも行われました。対面式で予定されていたイベント

が、大雪の為に急遽オンラインに変更など混乱もありましたが、延べ人数で100名を超える学生が参加。熱心にメモをする学生も多く、質疑応答などで相互理解を深める良い機会となりました。

参加した学生からは、「就職活動での適切な身だしなみ、メイクの方法を学ぶことができとても勉強になった。」「参加企業の人事部の方が分かりやすく説明していただき、質問にも詳しく回答して下さった。参加して有意義な時間を過ごせた。」「地元の企業について詳しく知ることができてよかった。」などの声がありました。



国際教育学科受け入れ留学生(T-SAP生)の修了式

2018年度に開始された国際教育学科の交換留学プログラム(T-SAP; Tsuru Study Abroad Program)で来日していた19名の留学生が全員無事にプログラムを修了することを祝い、加藤敦子学長のもと、12月18日に修了式を開催しました。19名のうち、9名はデンマークの大学(KP, UCSYD, UCN)、8名はスウェーデンの大学(Uppsala University)、2名はベルギーの大学(VIVES, PXL)、1名はフィンランドの大学(Åbo Academy)から本学に派遣された留学生たちです。留学生たちは、国際教育学科専門科目を中心

にそれぞれ10科目ずつ授業を履修し、本学学生と学びを共有しました。修了式では留学生代表の Djordje Olsen (KP) より、留学生を受け入れてくれた都留文科大学、留学生の履修を許可してくれた各科目担当教員、そして様々なサポートをしてくれたインターナショナル・コーディネーターをはじめとする教職員への感謝の言葉が語られました。国際教育学科がT-SAP留学生を受け入れるのは今回が6期目。この他にも今年度、日本の学校にて英語で教育実習を行うことのみを目的に来日する留学生も5名受け入れました。



合唱団が第76回全日本合唱コンクール全国大会で金賞・ 日本放送協会賞を受賞

合唱団が2023年11月25日、リューとぴあ・新潟市民文化会館コンサートホールにて開催された「第76回全日本合唱コンクール全国大会」において金賞、ならびに3位にあたる日本放送協会賞をあわせて受賞いたしました。おめでとうございます！



合唱団長コメント:

団員の努力が実り、沢山の皆さまの心に届く演奏ができたこと、何よりこのメンバーで大きな舞台に立つことができたことを大変嬉しく思います。

日頃から都留文科大学合唱団を応援してくださる皆様のおかげです。

これからも私たちの合唱で幸せが広がるよう、皆様とともに歩み続けます。

(都留文科大学合唱団 団長 チットウッド)

第57回全国国公立大学対抗スピードスケート競技会 兼 第62回関東甲信越大学スピードスケート競技大会 開催報告

氷上部は、2024年1月8日に富士急ハイランドコニファーフォレストセイコオーバルで行われた、第57回全国国公立大学対抗スピードスケート競技会 兼 第62回関東甲信越大学スピードスケート競技大会に参加しました。

関東甲越大学体育大会は、学生スポーツの健全な発達及び普及と関東近郊の国公立大学の親睦を図ることを目的としたスポーツ競技大会で、今年は本学が主管校を務め、信州大学、山梨学院大学が参加しました。スピードスケートの競技人口も、本学の氷上部員の数も減少している中で、よりスケートというマイナースポーツが浸透して欲しいという願いを持った開催となりました。

大会の開催にあたっては、山梨県スケート連盟の方々や、富士急ハイランドの方々、参加大学のご協力のもと、運営や賞状の作成を行いました。多くの人の支えがあってこそこのスポーツであると感じる大会となりました。

大会は、各校の男女が500m～3000mまでの距離別種目から1人2種目滑走し、リレーの順位を含めて学校対抗で競い合います。結果は、「女子1500m 3位」「男子学校対抗 3位」「女子学校対抗 3位」と、部員全員が大学からスピードスケートを始めた本学氷上部ですが、大いに健闘しました。

(氷上部主務 船木怜莉)



『TEDxHitotsubashiU2024』にスピーカーとして登壇

2024年2月11日(日)、一橋大学公認団体「TEDxHitotsubashiU」によるイベント『TEDxHitotsubashiU2024』に、学校教育学科3年の石原心路さんがスピーカーとして登壇し発表を行いました。



【石原さんコメント】

この度 Speaker に選んでいただきトークをしてきました。Title は「The Present Gives a "Present" to the Future」トーク後の Coffee Chat でも多くの方と思考の交流ができ、有意義な時間となりました。視聴する側だった TED に登壇者となって参加できたことは、私の人生にとって大きな要素となりました。都留文を知る小さなきっかけにもなったら嬉しいです。特別な肩書がなくても、想いがあれば大きな一歩を踏み出せるということを改めて感じました。



大学図書館だより

～ 図書館でもしゃべりたい!?!～



談話コーナー



学習室での読書会

「静か」なイメージがある図書館ですが会話のできる空間があるのをご存知でしょうか。

まずは 2F 階段横の談話コーナー。申込不要でいつでも利用できます。

次に 3,4 階の学習室。カウンターで申し込めば 3 時間(延長可)、プロジェクターや黒板、ホワイトボードも利用でき、ボードゲームも置いてあります。グループでの学習や発表の練習、話し合いにおすすめです。

最近では学習室で読書会や映画上映会等のイベントも行っています。詳細は、学内掲示や大学図書館の X(@tsurulib) をチェックしてくださいね。

訃報

令和 5 年 11 月 6 日 逝去 文学部初等教育学科 名誉教授 箱石 泰和氏

ここに先生の生前の御功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します

編集後記

国際教育学科 原 和久



富士山駅からの眺め（筆者撮影）

長かったコロナ禍を経て、少しずつ日常が戻ってきました。都留を走る富士急行線も、昨年ごろから一般客に加えてインバウンドの外国人観光客が徐々に戻りはじめ、季節によっては通勤者や地元民が席に座ることもできないほど車内が混雑しています。

ちょっとしたオーバーツーリズムで困惑することもあります。グローバル化の回復によって地域経済が息を吹き返す様子を肌で感じられるのは嬉しいことです。欧米諸国、豪州、韓国、マレーシア、インド、タイ・・・などなど、車内で交わされる様々な言語や異国のほのかな匂い、人々のにぎやかな表情やしぐさなど、「異文化」に触れながら通勤しています。文化や宗教が違って同じ地球という列車に同乗し旅を楽しむことができる・・・そんな平和な光景が世界中で見られる日が、一日もはやく訪れるといいな・・・心からそう思います。

ところで、先日列車の中がぎゅうぎゅうで席に座れず、仕方なく立ったまま車窓の風景をぼーっと見ていると、見る角度が変わったことでこれまで見えなかった「桂川」の凜とした姿が眼下に飛び込んできました。

都留市周辺は豊かな自然に囲まれ、富士山から湧き出る水が豊富なことで有名ですが、日光に照らされ水面がきらきらと流れる桂川のなんと壮麗で美しいことか!! 列車内が混んでおらず、立って車窓から見下ろすことがなかったら、ずっと知らないままだったかもしれません。いつもと違う角度で、新しい視点でものを見ることの大切さをあらためて学んだ瞬間でした。

3月は、旅立ちの季節。都留での思い出を胸に卒業生たちが全国に旅立っていきます。そんな卒業生たちに、マルセル・ブルーストの言葉をはなむけに送りたいと思います。「真の発見の旅とは、新しい景色を探すことではない。新しい目で見ることなのだ。」（『失われた時を求めて』より）

卒業生のみなさん、ご卒業おめでとう！新天地での活躍を心よりお祈りいたします！

ぶんだい堂

「マーガレット・アトウッド『侍女の物語』を越えて」
フェミニスト・ディストピアを越えて



加藤 めぐみ・中村 麻美 編
2023年12月発行
水声社

◇加藤 めぐみ
英文学科 教授

「文化的持続可能性とは何か」
文化のゆるやかな共鳴を捉えるために



原知章 編著
山越英嗣 他 著
2023年8月発行
ナカニシヤ出版

◇山越 英嗣
比較文化学科 准教授

インクルーシブ教育ハンドブック



ラニ・フロリアン 編・原著
堤 英俊 他 訳
2023年8月発行
北大路書房

◇堤 英俊
学校教育学科 准教授



〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1
☎ 0554-43-4341
URL: <https://www.tsuru.ac.jp/>

都留文科大学報 第154号 2024年3月4日発行

都留文科大学広報委員会

吉岡 卓 (委員長)・日向良和 (副委員長)・佐藤明浩 (担当副学長)・黒川智史・上野貴彦
原 和久・堤 英俊・菊地優美・神長 唯・安富博史 (企画広報担当)・大輪知穂 (IR 担当)
有馬治子 (キャリア支援センター担当)・天野麻由 (企画広報担当)・奥脇開斗 (企画広報担当)